

失時と苟も無常の火の無間を焼くことを知らば、豈寸陰たりとも空過して可ならむや、嗚呼此世の三毒五欲を厭離せば自ら正見の知も開け、此世の無常迅速を觀念せば自ら精進の行も起るべし、決して我佛教は彼れ耶教徒の妄想する如き無常教厭世教は非ざるなり、希くは世の志あらむ人は彼等が無稽の筆舌に眩惑せらるゝなく、眞正の佛教を研究して、上來述べ來れる諸邪見を打破して、正知見を啓發し、道徳行は安住せよ、余は更に進んで内道正見説を移り、而して常論の極を結び、他日學力と經驗とを得ば完全なる宗教書を著し、以て此篇の讀者に謝し、併せて國家を利益せむと欲するなり、

洪嶽曰、括
目而待、

願破邪 純正宗教論 上卷終

第三 内道正見篇

洪嶽曰、括
目而待、

失時と苟も無常の火の無間を燒くことを知らば豈寸陰たり
とも空過して可ならむや嗚呼此世の三毒五欲を厭離せば
自ら正見の知も開け此世の無常迅速を觀念せば自ら精進
の行も起るべし決して我佛教は彼れ邪教徒の妄想する如
き無常教厭世教よりは非ざるなり希くは世の志あらむ人は
彼等が無稽の筆舌に眩惑せらるゝなく眞正の佛教を研究
して上來述べ來れる諸邪見を打破して正知見を啓發し進
德行を安住せよ余は更に進むで内道正見説を移り而して
當論の極を結び他日學力と經驗とを得ば完全なる宗教書
を著し以て此篇の讀者に謝し併せて國家を利益せむと欲
するなり、

破邪 純正宗教論 上卷終

第三 内道正見篇

○實相眞理

雨田曰、十方三世、唯
有此心、一
切万物皆
是實相、惠
眼明了者、
獨能具之、

○大智慧
光明

第一章 自心實相を論ず

法華にいはゆる實相とは、即ち人々個々本具なる自心の異
稱なり。實相とは平たく言へば、まことのすがたといふこと
にて、諸法と自心との本來平等にて、清淨寂滅の者なり。然
れども世間には自他高下を立て、我他彼此を辨へて、遂に貴
賤を凌ぎ強は弱を蔑みして、朝より夕に至り、朔より晦ま
及び生より死ま訖るまで、我慢勝他を恣にし名聞利養を逞
ふするは、うもく迷の甚きものといふへき。自心實相には、
元來かくのごとき我他彼此の似せものなく、自他高下の見
るべきなく、我慢勝他の恃むべきなく、名聞利養の求むべき
なき、また迷悟凡聖の隔つべき似せものなく、たい清淨無漏
の大智慧光明あるのみ、この大智慧光明は諸法の眞理を照

洪嶽曰帝
綱重々主
伴無盡

〇唯一
乘法

破えて過去の過去際も在ても相違せず、未來の未來際に在ても相違せず、現在の現在際に住しても相違せず、又諸佛に在ても相違せず、衆生に在ても相違せざるなり、このゆゑに、此の大智慧光明の一念心、過去を緣すれば直ちに過去の千佛と互に照見して妨げず、若し未來を緣すれば未來の千佛と互に照見して妨げず、現在十方の諸佛を緣するも亦かくのことく、互に照見して毫も妨げざるなり、且らく三世の千佛と説けども、其の實は刹土微塵の諸佛なり、刹土微塵の諸佛なりといへども、唯一實相の眞理に相違なきなり、これを法華に、十方佛土中、唯一乘法と、言へり、この一乘法の一の二三に對する一、あらず、衆生心中も在ても、唯一乘法なり、自己心中も在ても、唯一乘法諸佛心中に在ても、唯一

〇心佛及
衆生是三
無差別

〇金剛般
若經

一乘法なり、これを華嚴經には心佛及衆生是三無差別といへり、又餘經には清淨法身とも、如來藏性ともいへり、かくの如く種々異稱あれども、要は只自己心實相に相違なきなり、昔時世尊が諸大弟子の中に於て、特に智慧第一の舍利弗と、無諍空行の須菩提との爲に、宣説せられたる金剛般若經なるものあり、この經は佛が菩薩心降伏の相、菩薩心對治の相、菩薩心所住の相、菩薩心無住の相を、説示せられたる者なり、而して金剛といひ、譬に約し、般若とは法に約していへるなり、其中に般若とは梵語にて此方に智慧と翻す、此智慧の世間の智慧といふ大に異なり、人々個々本具の自己心實相に於て、我なく執なき明了なる場所をいふなり、この智慧は過去の過去際に入り、未來の未來際に入り、現在の現在際に住する

洪嶽曰不
即世間智
慧亦不離
世間智慧

〇生住異滅

も、曾て生せず曾て滅せず、また暫らくも住せざる者なり、眞正の學士の此に於て決徹えて一点の疑惑なきに至らば、即ち本來の金剛般若の境界を得るなり、少分にては此を憶念信解すれば、餘ほど安樂なる場所を得るなり、然れども此の場所は容易に信解えがたき、世間多數の衆生の皆誤て、自心に生住異滅をとり、劫より劫を経て生死に沈淪するところ悲ひべく憐むべきなり、唯眞正の學士は彼の決徹して一点の疑惑なき般若を得むと欲せば、試みに目前の境界を對するとき、自心が生ずるか將た滅するかを省みよ、會得せむと要せば、直下に會得せよ、他時異日を期すへからず、他時異日を期せむと思はば、其の思ひの直ちに疑惑煩惱の大根底にして此の大根底を抜くへきなり、然せざる者は眞實の遺心な

〇疑惑頓斷

〇生滅之見

きものにて、名目こそ佛弟子なれども、其の實は凡夫外道の徒たり、然るに今時多數の人の誤て解するに、眼根境界を緣するとき、青黃赤白を見了て長短方圓に移るに當りて、青黃赤白の前心滅して長短方圓の後心生すと覺ゆ、又色を見了て聲を聞き、聲を聞き了て香を嗅き、香を嗅き了て味を嘗め、味を嘗め了て觸を覺し、觸を覺し了て後善惡邪正是非得失を分別慮知する時、常に前心は刹那々々滅えて、後心が新々に生ずる者と思ひ、又眼に松を見了て梅を見るとき、松の心は滅して梅の心生すと思へり、而してこれらは畢竟境界の影像讓奪の假相にして、自心實相とは相關せざる者なり、自心實相は、本來この影像、万般の外に超脱し、迥然として、物に依托せず、本來生滅の相に涉らざる者なり、既に生滅に

〇不生不滅、不增不減

滅

洪嶽曰此
般解釋是
著者得意
處

○自心金
剛寶

涉らざるものなれば、諸佛に在ても増せず、衆生に在ても減せず。十方法界に遍満しても大ならず、方寸も入ても小ならざるなり。之を金剛般若といふなり。されど彼の中庸に謂ひゆる放之則彌六合、卷之則退藏於密との語のや、似たれどもろの意味の天地懸隔なり。佛徒たる者の決して知解情量にて憶測すべからず。然り而も世間に金剛といふものありて之を金石にて打ても、碎破せられず、却て倒まに、金石を摧破し、此を火中に投して、焼けども、焼多ず、水中に没して、濕せども、濕はず。またろの中は一由旬の山河大地有情非情の影像を現すと、いへり、彼の自心金剛寶もろのどくにて、生住異滅の四相にも涉らず。瞋恚の火中に在ても壞滅せず。貪愛の水中に在ても浸潤せられず。方寸の中に隠れて

○行基菩薩語

○實相之
眞境界

も能く世界の影像を現きて、能く万物を照破するものたり。もろも佛陀に對すれば、三世諸佛が言説思慮を離れて、自心實相となり、衆生に對すれば、一切衆生が言説思慮を離れて、自心實相となり、乃至山河大地草木叢林に對すれば、各言説思慮を離れて、自心實相となり、來る、これを般若といふなり。行基菩薩の青々たる翠竹も、悉くこれ眞如なり。鬱々たる黄花も、般若非らざるなし。と云へるも、此事なり。三世諸佛は自心實相の中に於て無上正覺を成就す。もろも心經に、得阿耨多羅三藐三菩提とあり、十方の菩薩は此中にかゝて六度万行を修して、上求菩提、下化衆生をなす。もろも亦心無罣碍、故無有恐怖とあり、無量の聲聞緣覺は此中に於て四諦十二因縁を觀して、有無餘の二涅槃を証し、又八万

〇波羅密多

六万乃至十千劫を経て、回心向大して遂に佛果に到る、これを波羅密多といふ、波羅密多此は到彼岸と譯す、即ち諸佛の境界なり、境界といふは二途を亘るに似たれども、然にあらずこの諸佛直ちにお到彼岸なり、この到彼岸亦た菩薩の境界なり、境界といふは能所に亘るに似たれども、さにあらずこの菩薩直ちに到彼岸なり、下衆生を縁して慈悲を起す、この衆生界直ちに到彼岸なり、これを是れ般若波羅密多と謂ふ、この般若波羅密多は微妙甚深不可思議の境界にして、唯佛與佛の自証なり、このもゑに仮令十地等覺といふども、其の源底を極むべからず、況や二乘凡夫に於てをや、唯自心實相の智慧と無相三昧の智慧とを以て悟入すべきなり。さて亦たこの金剛經一部の肝要の應無所住而生其心の一

〇金剛經要語

雨田曰、應無所住、而生其心、維摩是曰、无住、大日經是曰、不生、般若曰、皆空、法華是曰、實相、各異義、同當、跡寂然、洪嶽曰、應無所住、而生其心、試問、非々、想天、今日、有幾人、退位、

句に攝盡せり、諸部の般若甚深の義も、此の一句に攝盡せり、一切修多羅の義も、この中よ攝盡せり、修觀行者の一切の對治門、証得門も、みなこの中に攝盡せり、凡ろ一法として、この一句中に攝盡せざるをなし、寔にありがたき文なり、古徳も多くこの文を思惟拈提せられたり、然れば今時の人も能く此文を受持し讀誦せ、思惟拈提せば利益甚少ならざるべし。もゑろれ、惠能大師の如き宿植徳本の學士ならば、一たび聞けば洞然大悟すべき文なり、たゞぬ小根劣機にて、其地に至らざるも、一念信解すれば、眞修行地の善種子となり、生死解脱の遠因縁となるべきなり、猶この應無所住而生其心の文を訓せば、應さお住する所なくして、而かも其の心を生ずべしと讀む、而してろの上文に曰く、諸の菩薩摩訶薩は、應さよ

○一切万境應无所住而生其心

かくの如き清淨の心を生すべし、色に住きて心を生すべからず、聲香味觸法に住きて心を生すべからず、應さよ所住なくして其心を生すべし、この中色と云ふは、天地日月山川草木雲煙塵霧禽獸魚蟲等の動植物情非情の一切眼に對する所の物、分析すべき底の物なり、總じて之を色と名く、この色に住きて心を生すべからずとは如何なる義ぞ、眼に柳を見るとき翠なりと思ふ心生するが、花を見るとき紅なりと思ふ心生するが、山を見るとき高しと思ふ心生するが、海を見るとき深しと思ふ心生するが、男女老少を見るとき好悪美醜と思ふ心生するが、將た名字を建立し相與を執取するが、活眼を開て見よ、色は元來言說思慮を離れて究竟解脱せる者にて、心の住着すべき底の物にあらじ、如何となれば、目前

○諸法從本來常自解脫相

の柳といつ柳と言ひまを、いつ柳と思ひしを、いつ翠と言ひしを、いつ翠と思ひしを、唯世間お名相言句あり、人間に智解情量あるに任せ、此を以て彼を計り、彼を以て此を度り、互に比擬計度するに依て、仮りに柳に似て現し、翠に似て現し、それ妄念想像を相應せしめて、仮りお此相あり、此妄念想像は、元來目前の境界とは相關らざるものなり、即ち妄念想像は、妄念想像にて所住なく、本來解脱の相なり、目前の境界は、唯これ、目前の境界にして、元來色と名くべき底の物にあらじ、況や心の住すべき底の物に非らじ、名は名にして所住なく、相は相にして所住なく、悉く本來解脱の境界なり、然るに一切衆生は誤て、此の仮有虚妄の色に住きて、更に一層の無明煩惱を増長せしめ、可愛不可愛の相を分別して、可愛の相

○一切万境有所住心

には貪欲を起し、不可愛の相に瞋恚を起し、甚しきお至ては財色に溺れて、自を味まし、他を惑はし、我を損し、人を害し、乃至佛陀の相好に住着の思を起し、また佛陀の神通妙用に住着の思を起し、又佛陀の音聲說法に住着の思を起す等、悉く皆外物に使われ、眼耳に誑からされ、居るなり、真正の學士は試みに五欲の境界に於て住する所なく、心を生じて見よ、如何なる境界ろ惣して色の可愛、不可愛の相に住して、心を生ずるを凡夫といふ、色の斷常空有に住して、心を生ずるを外道といふ、もしまた色の苦空無常無我の相を觀し、更に之を分析して、遂にその邊際を極め、三界を出離して、有無餘の二涅槃を証し、擇滅無爲我空偏眞の理に住して、心を生ずる之を劣慧の二乗と名く、是等の迷を對破せむ爲めに、應無所

○凡夫外道

○劣慧二乘

○菩薩斷無明

住而生其心と説かれたり、諸の菩薩は諸法の無自性に違して、三大僧祇の願を起し、十波羅密の行を修し、無量の衆生を濟度すれども、猶元品の無明に隱覆せられて、未だ全く解脱すること能はず、この無明煩惱を對治せむ爲に、應无所住而生其心と説かれたり、真正の學士は愛お於て深く觀察せよ、自心實相は前際も在るか、將た後際に在るか、或は内外に住するか、但しは中間に住するか、寔も自心は前後も在るとも、内外に住するとも、中間に存するとも、得て語るべからず、得て識るべからず、之を無所住の心といふ、無所住の心なれば、無明煩惱の起るべきなく、毘盧遮那佛は此心より出現し、阿彌陀佛も此心より建立す、觀音勢至の慈悲行願も此心より發起するなり、されば月慧法語に曰く、一切の佛菩薩の皆一

○無所住心

○月慧法語

雨田曰名
跡不二名
法相即故
能解名即
是領法体
也

○百七十六
心○具○足○し○て○別○の○跡○な○ま○然○り○と○い○へ○ど○も○其○の○徳○に○依○り○て
暫○ら○く○名○を○付○か○へ○種○々○名○字○か○わ○れ○り○阿○彌○陀○と○い○ふ○は○天○竺
の○語○な○り○唐○土○の○言○葉○お○は○無○量○壽○と○い○ふ○無○量○壽○と○は○ハ○カ○リ
な○き○い○の○ち○な○り○無○量○壽○と○い○へ○ば○生○ず○る○も○似○た○り○と○雖○も○全
く○生○せ○ず○死○す○る○に○似○た○り○と○い○へ○ど○も○全○く○死○せ○ず○生○死○な○き
所○即○ち○人○々○の○自○性○に○て○これ○を○阿○彌○陀○と○い○ふ○藥○師○と○い○ふ○は
本○よ○り○生○死○な○き○平○等○の○處○を○示○す○に○法○の○藥○を○以○て○差○別○の○病
を○治○す○と○い○ふ○意○な○り○是○の○ゆゑ○に○生○死○な○き○所○を○悟○り○ぬ○れ○ば
諸○病○悉○く○除○か○る○、是○を○藥○師○と○名○く○賢○性○佛○と○は○万○法○本○よ○り
差○別○な○し○一○切○の○有○情○非○情○平○等○お○ま○て○さ○ら○お○去○來○前○後○の○道
理○な○き○を○謂○ふ○釋○迦○と○い○ふ○は○万○法○本○よ○り○不○生○不○滅○な○り○これ
を○諸○法○從○本○來○常○自○寂○滅○相○と○謂○へ○り○寂○滅○相○と○い○ふ○は○有○ふ○も

洪猷曰如
掌中指卷
摩羅果

あ○ら○ず○無○に○も○あ○ら○ず○善○に○も○あ○ら○ず○惡○も○あ○ら○ず○生○も○あ
ら○ず○死○に○も○あ○ら○ず○迷○に○も○あ○ら○ず○悟○り○に○も○あ○ら○ず○諸○の○名○相
言○句○を○離○れ○た○り○此○の○眞○體○を○示○す○を○釋○迦○と○謂○ふ○な○り○是○れ○を
四○佛○と○謂○ひ○此○の○外○に○眞○言○宗○に○は○大○日○如○來○を○立○せ○り○大○日○如
來○と○云○ふ○は○万○法○の○正○跡○一○切○の○根○本○な○り○た○と○へ○ば○大○日○輪○の
虛○空○に○出○る○時○普○く○一○切○の○境○界○を○照○し○て○そ○の○迹○な○き○が○如○し
觀○音○と○云○ふ○は○慈○悲○を○跡○と○し○て○音○聲○を○用○と○す○勢○至○と○い○ふ○は
正○理○に○合○し○て○ろ○の○力○を○施○す○を○謂○ふ○文○殊○と○い○ふ○は○大○智○な○り
大○智○と○は○諸○の○料○間○分○別○を○離○れ○た○る○無○智○の○智○を○謂○ふ○普○賢○と
い○ふ○は○一○切○の○万○行○を○す○い○め○て○僧○と○な○り○俗○と○な○り○男○と○な○り
女○と○な○り○親○と○な○り○子○と○な○り○主○と○な○り○伴○と○な○り○万○般○の○人○を
救○濟○す○る○行○跡○を○謂○ふ○地○藏○と○い○ふ○は○人○々○具○足○各○々○圓○成○せ○る

洪嶽曰頭
々顯露物
物々全眞

雨田曰我
法二執終
生種々迷
妄執著不
捨業繫纏
縛自沈獄
裡无有出
期

心地を謂ふなり心地より一切の諸法を出生すたとへば大地の万物を出生するが如し虚空藏と云ふは我が心も身も外の境界も皆實の體なしなは虚空の如くなる處より一切の諸法現すこのもゑに虚空藏と謂へり斯の如く佛菩薩の皆一心の徳ならざるなし迷へは之を知らずして凡夫と思へり悟れば別に佛なきことを知るへしゆめく外は佛なりと思ふへからずと當さよ知るへし自心實相の外に佛陀なく菩薩なく衆生なく境界なきことをまことに自心實相の中には自他高下も閑言語なり迷悟凡聖も乾屎橛なり大小淺深も妄想中の差排にして全く自心實相と一切境界と一如平等にして同異の相なく自他の見なしと雖も然れども悲ひかな一切衆生は誤て此の五尺の形骸を認執して我と爲

〇楞嚴經
語

〇五性各
別

〇無性有
有情性

し遂に自他を見内外を見凡聖を見高下を見迷悟を見大小淺深差別を見るより種々無量の業を造作して十界の諸法を出現すこれを楞嚴の自心取自心非幻成幻法と云へり唯一實相の心性縁起して仮りに凡夫となり賢聖となり人天となり三乗となり来るより唯識家にては之を無始法爾の五性各別と云へり則ち過去無量劫より妄想深き衆生の自心よ適へば貪欲を起し自心に違へば瞋恚を起し生死に耽着して解脱を欣求せず散乱を好むて寂靜を求めず染汚を喜ひて清淨を願はず朝より夕に至るまで瞋恚にまた瞋恚を起し月より年お至るまで貪欲にまた貪欲を起し生死に至るまで五欲に耽着し名聞を追求して已まざるなりかくの如き者はたまく正法よ遇ふも發心するを知ら

○聞提貪

雨田曰、滔々學世皆此貪、

○世尊道眼

いず善知識に遇ふも修行するを覺らず、これを無性有情といふ、世尊在世、一波羅門あり、其家財富無數而して常、五欲耽樂し、前房後堂涼臺温室ことごとく、美を尽し、麗を極めて、一点の不足なきを欲し、年の既に八十の耆老なるにも拘りらず、未だ道德の何物たるを識らず、無常の旦夕に迫るを計らず、たゞ後堂の距陽未だ訖らざるを以て自ら經營て、大工左官日備等を指揮奔走し居れり、此の時世尊の道眼にてこの老翁の日を終へずして他界の人となるべきを知り玉へり、然るにこの老翁はさるとどの夢にも知らず、徒に世間五欲の事に精神を疲勞して、來世の福德とては毫もなし、甚だ憐愍たる者なり、乃ち世尊の阿難を將ひて此の老翁の家に至り慰問せらる、憐汝疲勞することなきや、汝

○世尊慰問

○要偈

洪嶽曰、翠

か身既に老衰し且汝か堂閑甚少とせず、然るを今此舍を作る、何の安樂を求むるもや、と老翁答ふ、前舎にの客を待ち、後堂には自ら處り、東西の兩廂には妻子眷屬金銀米穀器具を置き、而して我の夏至れば涼臺の上、冬來れば温室に入るを以て樂とすと、佛又曰く、汝少間事を廢去て坐せよ、我れ共に眞理を談論去て互に利益せむ、我に要偈あり存亡に益あり、以て汝も興へむと欲す可ならむやと、老翁答ふ、今遽忙なるを如此し坐して語るを得ず、後日更來るへ去、但世尊の謂はゆる要偈とは如何と、是又於て佛偈を説て曰く、有子有財、愚唯汲々、我且非我、何有子財、若常止此、寒當止此、愚多預慮、莫知來變、愚曠愚蔽、自謂我智、愚而稱智、是謂極愚、と波羅門此の偈を聞て曰く、善く説けり、されど今實に遠達なり、他

世盡貧翁
且無救之
佛

命、
〇貧翁非

日更に來て之を論せよと佛乃ち已むを得ず無縁の衆生度
し難とて嘆息云つゝ去りたまへり而るに老翁の數刻を
經さるに忽ち椽墮ちて其頭を打破り流血淋漓と云て即時
に非命せよかは室家驚啼號慟四隣を騷動せり蓋云佛の此
家を去る未だ遠からざるに此變ありたるなり佛の飯途梵
志數十人小逢ひ爲めに老翁の因縁を説きたまへば梵志等
皆欣然と云て篤信の心を生し大利益を得たりと此の老翁
の如きは則ち無性有情と謂ふも敢て不可なきなり
又之小反云て過去無量劫より法尔と云て一分法性の力を
得て貪欲に隨順すると薄く嗔恚に隨順するともまた薄く
愚痴慢嫉妬諂誑等の煩惱に隨順するとも亦た至て薄し
故に法爾として生死を厭ひて涅槃を欣ひ散乱を好まずし

性、
〇聲聞種

て寂靜を樂み染汚を歡はずして清淨を願ひ如是五塵六欲
の境界に觸れても常に隨順する心は至て微薄にして無漏
法に相應する心は極めて猛利なる者あり此類の人は佛に
逢ひて法を聞き善知識の開示を被れば直ちに初果二果乃
至阿羅漢果を証し超然として生死を透脱するなり是を聲
聞種性と謂ふ是は實小前の無性有情に比すれば雲壤月露
の差にて廣大の志願行あり廣大の禪定智あるなり然れど
も自心に自心を執取する無明小住着して解脱を欣求する
ゆゑに自調自度とて自分のみの安樂を期して未だ他の有
情までも利益する大機大用の人に非らず是れを聲聞種性
と云ふ

〇緣覺種

此中更に一類最勝俊發の機ありて敢て他の開示を待たず

性
雨田曰到
處道場所
遇說法

飛○花○落○葉○歷○緣○對○境○無○師○自○覺○し○超○然○と○し○て○三○界○を○出○離○す○る○
あり、是を緣覺種性と謂ふ、此類の人、他の開示を待たず無
師自覺する者なり、之を獨覺種性とも謂ふ、十善法語に四人
獨覺の緣事を引けり、曰く有部律の中に波羅尼斯城有一陶
師、於其作坊內有四人、獨覺爲求止宿、時諸大士前後而來、互不
相知、時一獨覺入火光定、遂即互見、共相問曰、仁者是誰、一人答
曰、仁等聞杖瓶王耶、餘獨覺云、我等嘗聞曰、其杖瓶王、我是他獨
覺、問曰、仁者國都豐饒、人民熾盛、矣緣何事而作出家、杖瓶獨覺
答言、我昔嘗在高樓、乃見鴉鳥持肉而飛、群類隨從、遞相爭擊、前
鴉鳥棄其肉、休高樹抄安閑而住、其衆鳥共相牽掣、互擊傷苦、我
見斯事、情生厭捨、作如是念、何用如是無益事、悉皆棄捨而爲出
家、と看よ、鴉鳥の目には此一團の肉はまことに美味好境な

〇杖瓶獨
覺

〇醜面獨
覺

らむ、今日人間の名利五欲、大官高爵の類も、一般の目には好
境界なるへけれども、諸天若くは佛菩薩の眼より見れば、初
めより此の一團肉を争ふ如きのみ、これ程のこと、徹底し
て疑はざる所に至れば、一切の欲境は皆風前の塵なるへし、
次問第二獨覺仁者是誰、彼即答曰、仁等頗聞醜面王否、答曰、嘗
聞、報言醜面王者、我是復問曰、仁者以何因緣而作出家、醜面獨
覺答曰、我在宮中、或時見一特牛、逐一特牛、共相舐觸、體體傷損、
一牛角折、退走而去、我既見已、情甚嘆嗟、而作是念、諸憂患、貪欲
爲本心、爲惱害、深生厭患、便即出家、是れ前の鴉鳥の肉を争
ふと、此特牛の特牛を争ふと、所見の境界は相似たれども、杖
瓶王と醜面王との心の感は別なり、前の杖瓶王獨覺は無益
鎖細の事に苦むことを感し、この醜面王獨覺は一切の苦は貪

〇梵樹獨覺

欲より起るを嗟嘆す、苟も此貪欲の苦本なるをだに決微して知れば、万境は自ら解脱するなり。次問第三獨覺仁者是、誰彼即答曰、卿等頗聞波羅庵斯城有梵摩達多、皆答言、嘗聞報言、其梵摩達多王、我是、餘獨覺問曰、仁以何緣而作出家、梵摩獨覺答言、我在王宮時、屢三春、百花敷榮、茂林清池、花鳥交映、孔雀鸚鵡、鴛鴦、雜類哀鳴、群飛合響、我時與宮人采女、出遊芳花、隨所周旋、與諸采女、歡娛嬉戲、噉美飯食、疲乏而臥、宮人縱逸、貪愛花果、見我眠詣諸樹邊、採花取菓、摧殘毀折、我時從睡眠起、見已情甚憂嘆、此樹向者花果茂盛、須臾間摧折盡、我身亦爾、世間亦爾、無常變壞、此不須疑、世間言論、唯惱身心、即棄捨國位、而作出家、と看よ、無佛世に出て、無師自覺するは高遠なること、甚だ高遠なれども、此花果の無常なるとは今日の人も目に觸

〇壯府獨覺

る、所なり、諸法の無常なるとも解すれば、解せらるること、なり、唯決微せざるよ、因て永く凡夫地に終るのみ、若し審諦思惟せば、人々個々聖域に入るも、遠くは有るまじきなり、次問第四獨覺仁、爲是誰答曰、卿等頗聞瓔珞城有壯勝王、答曰、聞報言、其壯勝王、我是、復問曰、仁以何緣而作出家、壯勝王獨覺答曰、我昔在宮中、情纏艷色、采女圍繞、時厭衆多、憤闢命一宮人、侍側、此女人臂著種々瓔珞環釧、隨動手時、其環釧互相擊觸、作關聲響、命脫一脫、二衆多皆脫、唯留一釧、時寂然無聲、我時見此事、已情生憂歎、此非情頑物、且互相擊觸、遂則作聲惱我耳門、況在諸欲之中、豈得安靜、遂命去女人、獨在床上思惟、世人抵接並惱心誠、無益我身、終護國出家、と看よ、衆多憤闢は一侍者には如かず、一侍者の隨從は獨立無伴の勝れるお如かず、念を弄し

○四人獨覺法門

智を違ふするは絶學無爲には知らず彼此相對すれば乘許す毫も取捨に涉れば身心を惱乱するなり此中自ら省察せよ一切事物到る所が法の在る所なり杖瓶王の鶏か法門となり來り醜面王は牛か法門となり來り梵授王の華樹か法門となり來り此壯勝王は女人環釧の聲が法門なり來る面白きとなりと此四人獨覺の因縁にて知るへし誰れ教ゆるとなきに法余として五欲を厭ひ散乱を離れ無常を觀し迥然として三界の火宅を遠離せるとを然るも此種性も聲聞種性の如く自心も自心を執取する無明住着の心より解脱を欣求する自利の心のみにて廣大なる利他の菩提心なしこれまた大機大用の人非らざるなり是を緣覺種性といふ又過去億劫より法性の力を受ると最勝廣大にして自心

性 ○菩薩種

○菩薩初散心

に自心を取るに至て微薄なり自他内外を見るを極めて微薄なり諸法平等を見るに至極猛利にして或は佛陀に逢て法を聴き或は善知識の開示を蒙り或は聖教に隨順し或は無師自覺して眞正の菩提心を發得する是を菩薩種性といふ此種性の人は寔に初發心より一切の有情非情は皆自心の所變なることを信得し諸佛の無上正覺も自心の所變なることを知り三乗の教行理果も自心の作用なることを了し一切万法の空中の雲の如く水中の月の如くなるを覺悟して諸佛と自心と衆生と平等々々にして別異なきことを徹底信得して是に於て自己の身心を悉く佛法に皈依して衆生を救濟す即ち一切衆生を見ると自身と全く齊くして自なく他なく我々所を離れ高下あることを見す内外あること

○不定種性

を見ず未來劫海を尽きてかくのごとく志しかくのごとく修しかくのごとく行せんと誓ふ其智願の尊勝なると天の如く其悲行の廣大なること地の如き凡夫二乗の能く及ぶ所に非らず學佛者の最も希望すべき種性なり、
 上のごとき種性の外に不定種性と謂ふあり此種性は佛陀に逢ひて聲聞の法を聽けば其果を証し乃至菩薩の法を聞けば其の果を証する機にして、いよいよ聲聞より緣覺緣覺より菩薩と順次昇進して一向定まらざるも亦に此の名を得たるなりこれをこれ五性各別といふ蓋し是れ唯識家の所談に於て且らく五性各別と説けども其實は唯一なる自心[◎]實相[◎]なり然れども無量劫より未來際まで歴然とて五性各別あることも亦面白きとある謂ひもる唯識家の事

○性相融會

相法門より五性各別と説くも天台家の理性法門より五性無差別唯一乘法と言ふ皆隨宜悉檀の善巧異説に於て其極意に達すれば何れも皆生死解脱の正法たることを知るなり是故に眞正の學士の請ふ常々深く省みよ自心若し少しよても世間の五欲に眩惑名聞利養に迷溺せし即ち無性有情の分際なり如斯き心よては到底聲聞の心を發得する能はず況や獨覺の心をやまた況や大乘菩薩の心をや是に於て能く省みて未だ及ばざる所あらは、大慚愧心を發起して自ら策勵勤行すへき而して世間の五欲等小厭離の心生するも未だ廣大の菩提心發起せされは、愈々勇猛精進して其心を發起すへし其心發起せば亦愈々其心を增長すへし、如是に心を用ゐる日夜に策勵精勤せば先に言へる無性有情

○發菩提心

別 〇生佛差別

ども遂に菩提心發起せずと爲さず何となれば無性とは
 無量劫來名利五欲耽着して菩提心發せざる邊に約て
 て名けたる者にして畢竟去て本來佛性なまると謂ふに非
 ればなりさて其名利五欲に執着すとは六塵の緣影に惑ふ
 て居るを云ふ六塵の緣影とて自心實相の外に之れある者
 に非らず故に智者は六塵の境界と自心實相と本來不二の
 理を見る是を佛陀と謂ふ愚者の之に反す是を凡夫といふ
 自心は無形なり之を理と云ふ境界は有形なり之を事と云
 ふ凡そ天地法界廣大無邊なりと雖も事理の二法に過さず
 此二法は互に融通去て事を離れて理なく理の外に事なき
 なり若事を離れて理を求めむか其は空想なり又理を外に
 して事を耐むか其は虚想なり空想虚想共に眞理實相

〇諸宗過失

〇相違せり余常に悲む台家の理觀は動もすれば空想に奔
 り蓮宗の事觀は虚想に涉り淨家の有相法門は常見に墮去
 禪宗の無相法門は斷見に陥るを庶くは眞正の學佛者は
 斯の如き過失を超過去て自性清淨の自心實相に安住せら
 れむとを余は更に進むて古今學佛者の根機差別を辯明去
 併せて其の修行方法をも論示せむとす

第二章 教禪二機を論ず

者 〇教禪二

古今禪伽の教法を修學する者に二類あり曰く教者曰く禪
 者是れなり固より教禪二者の修行方法異なりと雖も然れ
 どもその内証自得する所の生死透脱の極妙樂果を期する
 は一なり然るにその内証自得する所の心性は有ならず無
 ならず四句百非を絶せる中道實相の妙理なるとは前篇の

源分衆流

雨田曰種
性木來周
遍法界緣
具則生緣
缺則不生

始めに略述したる如くにて、寔に此の心性てふものは無形に於て色法のこどく形相なく、色の離跡を求むるに全く不可得なり、たとへば海水、お鹽味あれども、その鹽味は形の示すべきなく、色の見るべきなきが如し、又た樹木には、花性の在るありといへども、之を尋ねるに敢て見得べからざるが如し、されば古歌にも、年毎に咲くや芳野の山櫻木をわりて見よ花のありかを、とこれには是れ花性を求むるよ不可得なるを詠せよにて、またその反歌よ木の中よ花あれはこころ年ごとに咲や芳野の山櫻かな、といふるはこれ花性を求むれば不可得なれども、然れども春陽の縁に還へは爛漫たる紅花を綻ばすべき性ありとなり、人々個々本具の心性もまた斯の如く全く不可得なりと雖も、然れども縁にあ

○動物解

剖

洪嶽曰、好
一笑、

洪嶽曰、一
言引衆盲
雨田曰、此
漢語、不
止此事、感
病同源、腦

へば種々善惡の業を作りて、凡夫となり、佛陀となる決してこの心性なしと言ふべからず、嘗て聞く或る西洋人は動物の生けるまゝを分析解剖して、心性を求めたれども一物身の得ざるのみならず、影坊子だに得ざりよと、これはこれ野暮なる所業にて、固より無形の眞理即ち心性の學理に曉らかならざる痴漢なり、勿論西洋諸邦は有形の事物を分析する形已下の學理はよほど進歩して居るべけれども、然れども無形の眞理即ち心性を探求するに至ては、實に未だ東洋の脚下にも達せざるなり、然るに亦嘗て聞く大學の講師まで務められたる博學の聞へある、且つ所得ありとて自負し居らる、某禪師が説に依れば、東洋の俱舍唯識などは西洋の心理書に及ばず、と云ふに、俱舍唯識を學んで心性を極め

瘳異跡比
々皆余

いどならば寧ろ西洋の心理書を讀むに如かずと言われたり、どこれは之れ英雄人を欺くの方便説たるかは知らねども苟も佛教を修めたる某禪師の身として、かくの如き妄言を吐露せらるゝは甚だ不審に堪へざるなり、否某禪師は俱舍唯識の研究未だろの堂奥に到らざる歟、庶くは余の尊敬せる學士將た親愛なる兄姉は、必ず某禪師のごとき魔説に眩惑せらるゝなかれ、
そもく、此の無形の心性ハ一切有情ハ遍滿して成なされ、
く、に具せり、中につるて人間の心性ハ最も明了に最も殊勝なる者たり、このもろハ佛法に遭ふて修學すれば、隨分佛知見をも開き、最極高等の安心立命をも得るなり、元來人々個々の心性てふものは、一如平等にして差別なければども、

○同一心性

雨田曰積

習成性世

俗是曰第

二天性

○無始薰

習

洪嶽曰學

習有漸

○現在薰

習

た、無始の薰習力ハ依て根ハ利鈍機に遲速あるなり、もろに修學解行するにも二ハ別れて、概ね根機の鈍なる者は、教相に依て修學せり、もろに解脱遲し、根機の利なる者は坐禪ハ依て直入せり、もろに成佛速し、解脱成佛ハ遲速あり、もろの心性各別なるに非らず、而して無始薰習とは且らく現在の上にて之を言ハ、彼の小兒の時師匠が筆を把り手を持ちて、いろはを教ゆるに、小兒は何とも知れぬ折釘の如く將た蚯蚓の如き字を書き居れども、日夜うれに心を注ひて勉強すれば漸次に能書となり、後には字を書くの外ハ心なく心の外に字を書くものなきハ至て始めて筆道の妙を得るなり、又少女の初め母親が針を把り手を持ちて裁縫を訓ゆに、これも少女の時には何とも知れぬ山道のうねく

したる如く蚯蚓の地をほりたる如く縫ひ居れども母の教
ゆるまゝに夙夜うれに心を専にして縫ひ居れば後には是
非とも上手となりて則ち物を縫ふ手と心と相應して縫ふ
手の外は心なく心の外は縫ふ手なしと云ふ時節に至て始
めて裁縫の妙を得るなり、その他詩歌文章伎藝百般の事に
至るまで皆その如くにて心を用ゐれば用ゐたるだけの妙
を得るなり、たとぬ筆を執り針を持ちても心を用ひざれば
決して上達せざるなり、即ち心を用ゐるがいはゆる薫習よ
て、この薫習熟するに隨て、伎藝なり詩歌なり文章なり各
の用ゐたるだけの妙は必ず顯現するなり、況や無始曠劫よ
り眞修行地に心を用ゐる來れる禪者をや、則ち現在善知識お
遣ひて有と説くを聞ては直下よ成佛し、無と説くを聞ては

○薫習因

○歷縁對境悉皆悟道

○寶間比丘

○不偷盜戒

直下よ解脱し、中と説くを聞ては直下よ自在を得る如きは
皆過去薫習の致す所なり、若しまた善知識に遭はずとも飛
花を見て覺悟せ、落葉を見て解脱せ、松風を聞て得道し、江月
を見て反照するあり、况や現今見聞覺知する所の境界を悉
く自心實相と相應せ、去めて法界同躰の眞源に到達するも
の、實に頓機大根の人と云ふべきなり、録に曰く、佛在世に
寶間比丘といふあり、始めて具足戒を受けて佛所に往き禮
拜して白す、弟子既に受戒去畢る已後何如が修行して無漏
聖道を得べき、世尊の曰く、汝が物に非ずば取ることなかれ
と比丘この一言の教を棄け禮拜去て樹下に至り、石上に
坐具を布き結跏趺坐して思惟すらく、大聖世尊の汝が物に
非ず取とる勿れとの教、如何なる義ぞ、他の金銀財寶、位

雨田曰、渺茫宇宙、無有一我、无一我處、即是大我、

官符はこの類何ぞ世尊の教を待ひ金口感愍なる此等の義に非らじ今我物といふは畢竟何物ぞ今までの屋宅財寶祿位官符は出家去れば我物ならず取るべきか非らず次に妻妾眷属の類これも出家去れば我物ならず取るべきに非らず次に此五尺餘の身軀頭目手足是れ我物なるべきか是れも只父母肉血の餘分なり生れ落し已來衣服や飲食や卧具醫藥まで養ひ來れる底の者なり終に朽敗去て土塊お飯すべきのみ取るべきか非らず眼に色を見るこれ我物なるべきかこれも内に眼根あり外に色境あり中間に虚空あり光明あり衆縁和合去て假りに見相あり鏡に寫る影の如く實軀なければ我物に非らず取るべからず次に耳に聲を聞くこれ我物なるべきかこれも内に耳根あり外に聲境あり

〇根境識三無我

洪嶽曰、唯許老胡知不許老胡會

り遠からず近からず他の障、碍なき時衆縁和合去て仮りに聞相を現す宛も空谷の響の如くろの實軀なき我物ならず取るべきに非らず乃至意に善惡邪正是非得失を分別するこれ我物なるべきかこの心も自ら心とは知らず自ら心とはいはず意と云ふ名も識と云ふ名も皆外より名け去者なり况や是非善惡等と分別するも畢竟見聞覺知の影にてろの實軀なし我物ならず取るべからずと決すこの時一切の我物とすべきなく廓然大悟して初果に入り再び思惟して羅漢果を証せられたり(十善法語)と是に由て之を觀れば頓機大根の人なれば一を聞て十を知り百を覺り乃至一切万法の源底を尽す如是を眞正の禪者とは謂ふなり「さわさりながら頓機大根の人のみ禪者なりとも言ひがたし。ろは彼

〇難提比丘

の寶間比丘と同時に佛に遭へる難提比丘といへるあり、この比丘は行住坐臥禪那心を寄せ、餘念なく精進修行せられたり、然るに他の御弟子や居士達はみな佛の四諦六度等の法輪を聽聞して初果二果乃至阿羅漢果を証し、或は緣覺果を得し、或は菩薩の無生忍を証得せられたれども、獨り難提比丘のみは如何なる宿世の因縁よてやありけむ、如何はと法輪を聽聞するも心性を啓發するを得ず、覺悟するも能へざりし、然れども佛の大慈大悲やまず、五百の羅漢に命ぜらるの比丘の爲めに各々に四諦の法門を轉教せしめらるゝ、亦た却て他の傍聽せる大衆は威な初果二果乃至四果を証得せられたれども、難提比丘のみは更に所得なかりし、爰に於て自らの愚鈍なるを親ら痛歎し、悲涕號慟しつ

〇同悲泣

洪嶽曰、吾宗別有生涯、只要眞參實證、

〇坐禪功德

佛前に詣りて、その所以を諮詢せり、此時世尊は更にこの比丘の爲に禪經と云ふを説示せられたり、之に因て漸やく氣付きて証悟せり、やあり、當さに知るべし、禪者にも鈍根劣機あるを、然れば則ち機根の愚鈍なると難提比丘の如くなるも、その志だも難提比丘の如く、純一無雜なれば、必ず証悟を得らるべきなり、
總して衆生は悉くこの心性を忘れて、たゞかの妄想憶度を認めて我が心性となし、常に邪曲小轉して居る者なれば、坐禪の法を以てこの妄想憶度を打破せ、必ず正路に皈ずるを得るなり、たとゑば蛇の行くも曲り居るにも直からざれども、之を竹管に入る、ときは是非とも真直になるが若し坐禪の功德は實に廣大なり、され凡聖同一の心性

正、〇捨邪皈

が境界を縁するも生死法となるあり。解脱法となるあり。邪法となるあり。正法となるあり。是れ底の事は實修實行の禪者に非らされば信解を得ざるべし。もろもろ眞正の禪者たらんと欲せば眼に色を見るとき直下に邪か正かを徹底して省悟せよ。他時異日を期すべからず。耳を聲を聞くときもまたかくの如く、乃至鼻舌身意が香味觸法を縁する時もまた皆如是く、見聞覺知行住坐臥語默作々、一々皆邪か正かを徹底して省悟せよ。若し邪法に轉じて居らばこの邪法無始已來生死に流轉せしめ六道に輪廻せまむる惡賊なり。この惡賊の如何なる者ぞと徹底して省悟せよ。また數息觀を修し不淨觀を行する時、心性は邪路に轉するか。將た正道に皈するか直下に徹底して省悟せよ。頓機大根の禪者ならば佛

者、〇佛前禪

の出世を待ちて佛法を行するも及ばず。自心直下に省悟すれば豁然大覺するなり。斯の如き禪者の爲めには法相の名目も元來無用なり。歴代の祖師や善知識も元來無用なり。持戒苦行も元來無用なり。されど諸佛出世已前に向て無師自覺したりとて、別よるの心性高勝なるもあらず。また諸佛の出世も遭ふて坐禪工夫して漸やく心性を啓發し証果せり。とて、更にその心性殊勝なるにもあらず。また諸佛の滅後に生れて數息觀を以て散亂を治し、不淨觀を以て貪欲を治し、慈悲觀を以て瞋恚を治する等、漸次に坐禪工夫して得悟せり。とて、殊にその心性輕賤すべきにもあらず。何となれば一切衆生の心性は一如平等にして、本來善にあらず。惡にあらず。無記にあらず。邪にあらず。正にあらず。迷にあらず。悟に

者、〇在世禪

者、〇滅后禪

機
〇利鈍二

あ。ら。ず。况。や。一。切。の。名。句。言。詮。を。離。れ。一。切。の。思。慮。憶。度。を。絶。し。たり。然。れ。ば。何。れ。が。利。根。の。何。れ。が。鈍。根。の。何。れ。が。高。勝。の。何。れ。が。下。劣。の。と。い。ふ。と。な。し。たい。一。分。省。み。て。少。分。の。得。益。わ。り。方。分。省。み。て。圓。滿。の。得。益。わ。る。の。こ。れ。ろ。の。人。の。無。始。の。薰。習。に。依。り。て。仮。り。に。利。鈍。遲。速。の。差。別。あ。る。に。外。な。ら。ず。今。彼。の。禪。宗。五。祖。の。下。よ。て。同。時。修。行。せ。ら。れ。た。る。惠。能。大。師。と。神。秀。禪。師。と。の。利。鈍。得。力。の。境。界。を。試。み。に。比。較。し。て。論。示。せ。む。と。す。る。に。彼。の。二。師。得。力。の。本。領。を。吐。露。せ。ら。れ。た。る。偈。に。因。て。之。を。推。堪。す。る。よ。り。善。き。は。な。か。る。べ。し。乃。ち。神。秀。禪。師。得。法。の。偈。に。曰。く、
身。是。菩。提。樹。 心。如。明。鏡。臺。 時。々。勤。拂。拭。 勿。使。惹。塵。埃。
と。此。偈。は。實。に。神。秀。禪。師。が。充。分。は。工。夫。を。用。ひ。て。自。身。修。行。の。得。力。と。自。心。本。領。の。場。所。を。有。り。の。ま。ま。に。吐。露。せ。ら。れ。た。る。者。

〇神秀禪
師得法偈

にして容易ならざる絶偈なり、後世の坐禪家は神秀といはば悟道未熟の機に妄想すれども大に然らず、試みに思へ貫梅七百の高僧の一々威な盲禪者にては非らざりし、而して五祖のその高僧中より特お抜擢して教授の師と定められたり、この偈も實に七百の高僧の教授師たるに堪ゆる分あり、但彼の惠能大師お比すれば素より大お不足なれども、今時の癡悟なる坐禪家の夢にも及ぶ所にあらず、然るお今時癡悟なる坐禪家のこの偈を解きていわく、身是菩提樹とい猶自己の色法に取付たる説なり、心如明鏡臺とはこれ未だ無一物の境界に超然たらざるの語なり、時々勤乃至塵埃とは即ち修行地に前々の非を知るは、後々の行徑と名けて未だ真面白の場所に至らざるなり、とその他かくの如き種々

〇癡悟者
妄解

〇菩提樹

の知解情量説を爲して得々然たるあり、如此きは到底神秀
禪師の脚下にも寄り付くとを得ず、寧ろ大漫たるなり、教家
にすら文に依て義を解するは三世諸佛の怨なり、とあり、眞
理は必ず默識神通を期するなり、

洪嶽曰、無
風起波、

〇欲界生

先づ菩提樹との現今吾人が境界に觸れて貪欲をおこし、曠
恚をおこし、名聞利養に轉せられておる間は九こかま地獄
餓鬼畜生と同玄心性にて、即ち欲界中麤品なる生死なり、仰
々佛法修行等は思もよらず至て下劣なる衆生なり、またこ
の心性てふ者の一切障礙のなきものなれども、五尺の形骸
を棄るより、心性は既ふこの内に在て須臾もこの色身を離
る、能はざるなり、宛も鳥の籠に在る如く、魚の網に入れる
如く、獸の檻に閉ちられたる如く、おて容易に解脱すること

〇色界生

かたし、即ち三毒麤惡の煩惱を伏すといねども、猶この心性
の色身は繫縛せらる、閻を色界の生死といふ、こゝにおる
て禪定を發得する之を色界定と名く、然るに世尊は未だ出
家せられずして猶春宮にお在りませるとき、四門に出遊して
老病死の者を現見して、忽ち有爲轉變なる世間の實相を看
破して、御園なる閻浮樹の下にお坐して色界定を發得せられ
たり、當時太子の御徳にて日は西山に傾くと雖も、樹の影は
少も移らざりしとあり、樹影の移ると移らざるとは且らく
措き太子のいまだ出家せられざる已前、又得られたる禪定
の境界を見よ、これとても今時坐禪家の容易お及ぶ所には
あらざるなり、況や太子は出家志て初め阿闍迦園の仙人に
逢わせられて無所有處定といふを得られたり、この無所有

〇太子坐

〇無所有
處定

〇仙人勸誘

處定といふは前に云へる色身お心性の繫縛せらるゝ境界を一層超越して、心性が虚空と合し虚空もまた心性の所變なることを知て、廣大無邊なる心性を變現す、この心性もまた虚空の如くなりと知るを謂ふなり、然るに太子は過去僧祇劫より功徳を積み善業薰習の御身なるがゆゑに速かにその禪定を發得せられたり、故に仙人は証明して曰く、我が得る所の法汝また得たり、汝が知る所の法我れ亦た知れり、謂ふこれよりもろくの弟子を教授せよ、この時太子は問て曰く、此の上に修學すべき法なきや、と仙人答て曰く、此の上お法なし、此の法は最極無上の眞理なり、と然るに太子のこの法いまだ眞理の頂頭にあらざることを知見して、これを捨て去り、鬱頭藍子の處に至らる、この仙人は迦蘭仙人の禪

〇非々想定

定より一層高尙なる非想非々想定を証悟せり、太子また久からずしてこの禪定をも証得せられたり、これ亦た未だ眞理の極際よあらざることを知見して、此を捨て去り、マデリンに至り、獨坐六年苦行を修して、遂に金剛喻定に入て正覺を成せられむと爲せしに、その所の佛の菩提座を載るに堪へざるより、大地震動せり、之れに因て其の座を移して菩提樹下金剛寶石の上に坐して、無上正覺を成就せられたり、これを是れ菩提樹とはいふなり、而して今この菩提樹の他に向て求むべきにあらす、人々個々五尺の身が即ち菩提樹なり、この事を身是菩提樹とはいふなり、如何がこの身菩提樹なるを眞正の禪者は之を行せむと要せば、則ち行せよ、坐せむと要せば、則ち坐せよ、行は即ち如來の行なり、坐は即ち如來

〇世尊正覺、
兩田曰、已
是菩提樹、
何用呶々
饒舌、

- 色塵法
- 界
- 聲塵法
- 界
- 香塵法
- 界
- 味塵法
- 界
- 觸塵法

の坐なり。眼にふれては見と云ひ耳にふれては聞といひ乃至身にふれては冷暖痛痒を覺知し手も在ては執持し足に在ては歩行するなり謂の眼にふれる色に生もなく滅もなく去もなく來もなくまことに究竟解脱の境界なり十方の諸佛はこの色塵中に於て無上正覺を成せられたり耳にふれる聲も生もなく滅もなく去もなく來もなくまことに本來解脱の境界なり一切の菩薩はこの聲塵中に於て上求下化を行せられたり鼻にふれる香に生もなく滅もなく去もなく來もなく本來解脱の境界なり歷代の祖師はこの中に攝物利生を爲せり舌にふれる味に生もなく滅もなく去もなく來もなく言説思慮をいなれて究竟解脱せる者なり心も飢渴の餓鬼はこの中より解脱安樂を得るなり身も

界

- 心如明鏡臺
- 洪嶽曰打
- 破明鏡來
- 與汝婚相
- 見

觸れる寒熱痛痒も言説思慮をはなれて生もなく滅もなく去もなく來もなく本來解脱の境界なり心も地に地獄畜生の嗽害苦惱はこの中に安穩快樂を得るなり彼の神秀禪師はかくの如きの自他の境界ことごとく解脱涅槃なる場所を自得て身是菩提樹と説かれたり固よりこれは至極略説おて大海の一滴太山の一塵を説示せるのみ次に心如明鏡臺とは漢來れば漢現し胡來れば胡現し一代藏經の大小經實顯密半滿も安排布置せずして一擧すれば則明了なり一千七百の古則公案も思慮分別を用ひずして一擧すれば則ち照了す聲聞緣覺の階級より及び六道の生死に流轉せる衆生の此に死し彼に生するとも分明に覺了す一切の學者の淺深徳者の厚薄も一見すれば則ち識了せらるる場所

を謂ふなり、神秀禪師のこの一偈は寔に甚深にして、たとひ大千の草木を以て筆とし、四大海の水を墨として説述すとも、尽すべきあらず、此の一偈より無量無邊の法門出現するなり、

○時々勤拂拭勿使惹塵埃

次ハ時々勤拂拭勿使惹塵埃とは、上の所説の如き場所に至て後また非の生するとあり、之れを顧みて時々乃至塵埃とは云ふなり、然れば何物か塵埃なる曰く名聞利養是れなり、知解情量是れなり、佛我法執是れなり、一切の我見妄想是れなり、則ち時々顧みて明了に是等の非を知らるゝなり、而してこれは得後の修行を述へられたるものにて、古人も大事未了時ハシ如シ裴考妣スルガ大事已了亦如裴考妣ト云ヘる如く、即ち孝行のもの、父母の裴ハシ在る時は、美味を口にすとも甘

○真正禪者覺悟

○後世禪者覺悟

○佛祖行跡

からず絹帛を身にすとも暖ならざる如く、大事未了前の實にかくの如くなるべし、大事已了後も亦た實にかくの如くなるべし、然るに今時纏悟なる坐禪家は悟道ののちの紅日三竿伸脚眠何事を爲すもよし、爲さゝるもよしと思ひて无事安閑に消光する者あり、これ大なる誤りなり、試みに活潑々地の眼あるもの見よ、黃面老子は成道の後は如何にして居られしぞ、大迦葉より歷代の祖師先徳は已了後如何にして居られしぞ、決して無事安閑の境界は非らざりしをさるを已了後は何事を爲さゝるもよしと謂ふは、實は天魔波旬なり、天魔波旬も六な天魔波旬にはあらで木葉天狗の眷屬なり、かくのどき者世間に出現して種々雜多の妄言憶説を逞ふして古則公案を批判し、又は祖録妙偈などを解

洪嶽曰、兩
頭俱截斷、
一劍倚天
寒、

〇惠能大
師妙偈、

釋して真正なる佛法を滅却するなり、恐るべく悲むべきの
至なり、神秀禪師の偈は此の輩のかりうめふも測量玄得べ
きよあらず、是則ち身是菩提樹、身是菩提樹は自ら契當の時節をい
れたる者なり、心如明鏡臺、心如明鏡臺は修行得力の場所をいわれた
る者なり、時々勤拂拭等とは得後の修行をいわれたる者よ
して、此の一偈中に自身得力の要領を親切丁寧に吐露せら
れたり、まことに甚深なる法門なり、斯の如く實に神秀禪師
の修行は至らざるにあらず、神秀禪師の境界は高からざる
あならず、然れども六祖大師に比すれば、音に芥子と須彌の
如く牛蹄水と大海水との如き差のみにあらざるなり、則ち
六祖大師の偈も曰く、

菩提元無樹、菩提元無樹 明鏡亦非臺、明鏡亦非臺 本無一物、本無一物 何處惹塵埃、何處惹塵埃

〇南頓北
漸、

洪嶽曰、無
念無想之
謂黑闇鬼
窟裏、

と寔に真正の志を起せる禪者ならば、深く省みて眞實に修
行玄到れば、思慮分別を用ひず、玄て神秀と六祖との境界は
この偈に依て明かに証知せらるべきなり、且又た此偈に依
て南頓北漸と派れたるなり、ありがたきことには、今時禪家の
末の末に至るまで、自然に六祖の流風は存するも、神秀の如
きは一向に残る所なし、さもあるべきことなり、然り而して六
祖は實に修行の至れるともなく、工夫の極れるともなく、甚
深なるともなく、微細なるともなく、無念無相の境界なり、こ
のゆゑに六祖に在ては神秀に修行せしめて見て居る、加之
ならず三世諸佛も菩提を成せしめて見て居る、十方の菩薩
も六度万行を修せ玄めて見て居る、一切衆生に生死流轉せ
玄めて見て居る、蓋玄六祖は唐の則天后の時の人なり、則天

の即位や狄仁傑の職伐するを見て居る、褚遂良や歐陽詢に字を書せて見て居る、仕進者には官位に昇らせて見て居る、我が日本六十餘州を出現して見て居る、支那の四百餘州を出現して見て居る、印度の五天竺を出現して見て居る、乃至十方世界を出現して見て居る、過去未來を出現して見て居る、何となれば今此の三界のみなこれ我が有なりその中の衆生は悉くこれ吾子なればなり、然ればさち六祖は三界六道の生死より一切万法の起滅の當相即言說思慮を離れたる常寂滅相究竟解脱の境界に安住せり、六祖は神秀の修行を自己の修行とせらるゝるゝ菩提元無樹なり、六祖は神秀の得力を以て自己の得力とせらるゝるゝに明鏡亦非臺なり、六祖は神秀の聖躰長養を以て自己の受用とせらるゝるゝに

〇六祖眞境界

洪嶽曰、唯々怪事

本來無一物何處惹塵埃となり、即ち菩提元無樹とは雨下て地上濕ふといふとなり、明鏡亦非臺とは日出て、乾坤耀くといふとなり、本來無一物とは庭前の柏樹子といふとなり、何處惹塵埃とは薄ふ穂の出たといふとなり、かく云へば早や、旨禪者は妄想分別知解情量に任せて種々評判するに相違なし、そは詮なきとなり、元來一千七百の古則公案も、七千餘卷の經律論藏も、初心の者には、初心相應の判斷あり、達者には、達者相應の判斷あるなり、然れども一分にても自己の妄想分別を雜ゆれば、悉く邪論魔説となる、庶くは世間の導師だらむ、眞正の學士ハ正見の啓發するまでハ、慢りに口を開くななかれ、口を開けば、自他を迷惑し、三世諸佛の教範に、ろひきて大怨敵となるなり。

〇未得道者禁誡

洪嶽曰止
々不須說
我法妙難
思

用 〇六祖力

なほ神秀と六祖との境界を約言せば神秀は一千七百の公
案も七千餘卷の經文も此方より心を以て向へば直ちに相
應する境界なり六祖は五祖に啓白せられたる如く弟子常
生智慧不離自性として一切の公案も經文も悉く彼方より相
應えて自心と妨げざる境界なり尙又た其力用を約言せば
神秀の身是菩提樹と説くを聞けば六祖は常生智慧不離自
性玄て菩提元無樹と仰せらる神秀の心如明鏡臺と説くを
聞けば六祖は常生智慧不離自性して明鏡亦非臺と仰せら
る神秀の時々勤拂拭と説くを聞けば六祖は常生智慧不離
自性玄て本來無一物と仰せらる神秀の勿使惹塵埃と説く
を聞けば六祖は常生智慧不離自性玄て何處惹塵埃と仰せ
らる神秀の一擧すれば則ち一切諸法の落處を知るは猶自

用 〇神秀力

洪嶽曰不
曾佛法之
四字可以
較一代藏
經

性をはなれて自身に工夫を用ゐる智慧を要するなり常生智
惠不離自性にはわらずこのゆゑに神秀の力用なれば律義
叮寧なる修行者なれば随分攝化するを得るも若しこれ
馬祖下の臘師の弓箭を帯ひて向ふ如きは神秀の手には合
はざるべし如何となれば神秀には自身の修行あり工夫あ
り受用あればなり古人も黃梅七百の高僧は尽くこれ會佛
法底の人なり唯有虚行者不曾佛法と云へる如く六祖大師
は修行もなく悟道もなく受用もなく全く法界一牧の境界
なるゆゑに一切衆生の煩惱が此の老漢の受用なり一切衆
生の無明が此の老漢の悟道なり一切衆生の伎倆が此の老
漢の修行なり一切衆生の智慧が此の老漢の自性なり一切
衆生の形相が此の老漢の色身なり如此き老漢なればこそ

道類皆成佛

たどひ如何なる愚痴驢昧の者來るも愚痴驢昧なりに悟道せしむ又智慧才覺の者來るもその智慧才覺なりに悟道せまむ又尊貴福德の人來るも尊貴福德なりに悟道せまむ又貧窮乞丐の者來るも貧窮乞丐なりに悟道せまむ又覺了せば諸佛と齊まき有法を持來るもその持來れるまゝにて悟道せまむ無法を持來るも亦如此ま但篤實に親切に來るならば皆悉く一切智地に至らしむる力用あるなり當に知るべま神秀禪師と六祖大師とは五祖の下にて同一に修行工夫せられたる人なれどもその悟道力用の利鈍淺深あるとを蓋まこれ無始薰習の致す所なり然りと雖も實際の品評に至ては各自學士の自知すへまことにして到底説て尽るとにわらず聞て尽るとにわらず也ま今略説一隅を擧げ以

〇教者

て智者の三隅反知を待つのみ

- 〇五蘊皆空
- 〇三世心不可得

次お教者にも亦た利鈍の二機あるとを記憶せさるへからず則ち今時書物の科を逐ひ句を尋ねて種々薩陀の珍事を識り以て知解情量を逞ふする如きは世間お謂はゆる物知りにて真正の教者にはわらず斯の如き輩を佛の言へり終日他の財宝をかぞへて自ら半錢の分なきが如ま然れば則ち真正の教者とは經論の法相名目を繕りて自己本心に反照し如説修行するをいふなり即ち心經の五蘊皆空の語を見ればそれを直下に自己の色心に省みてよくく五蘊色心の本來空になるべきまでま憶念信解するなり又た金剛經の三世心不可得の文を見てはそれを直下に自心に省みて此の心の本跡有ならず無ならず鏡中ま寫る影の如く

雨田曰三世不可得
遷流不住
相反覆蹤
橫說得無
餘蘊

〇三世仮名

ろの實體を求むれば全く不可得なるを憶念信解するなり、試みに三世心不可得なるを云ひ、この心の境を觸れ縁を隨て生滅去來隱顯出沒して微塵ばかりも蹤跡を止めず蹤跡を止めずと雖も常に前滅後生して流水の混々として間斷なきが如し、されば過去の心は直ちに現在の心にして現在の心の直ちに未來の心なり、是の故に過去の心と現在の心と一ならず異ならず、現在の心と未來の心と一ならず異ならず、三世の心一異を論すべからず、謂ふ所の過去の現在の未來のといふ三世の名字も畢竟して衆生妄想の差排にして眞理上に於てろの實體あるにあらざるなり、設令ば今日の心上より之を言へば昨日が過去となり、明日が未來となりて、今日が現在となるべけれども、昨日の

〇三世無邊際

雨田曰電氣迅速人皆怪之心之靈妙不

心上より之を言へば今日の未來となり、明日より之を言へば今日の過去となるなり、一日の上にて朝を現在とすれば晝は未來となり夕を現在とすれば晝の過去となるなり、かくの如く心念の起る時を現在とすれば、ろの已前の過去に属し滅し去る時を未來と爲すなり、されば前念を過去として、それより前念々々と何十百千万億も皆過去にして、實に那由陀阿僧祇なり、後念を以て未來とするも亦如是く幾百千万億劫なるや、實にその邊際を量るべからず、又現在の心も極々微細刹那に至ては到底量知ることを得べからず、論に曰く、凡夫の見には時といふものすらありと思へり、いま此の時を分ち一晝夜を二十四時とし、ろの一時を六十分とし、ろの一分を六十秒とす、然るに電氣の迅速なる一分間

知幾倍人
却不怪可
謂奇怪

地球を四週す、この電氣必ず形體あるものによるが、もろに、その形體の一々の極微を通過すべし、その一極微を通過するの時、また時と云はざるを得ず、この時間、は彼の一秒の何億万分の一なることを知らず、斯の如く、去て時間の微妙を、尽さば、地球上の算術家を、集め、未來際を、尽くして、これを、分割するも、時間の、間隔を、尽くすこと、能はざるへし、是れ、全く時なるものありと、豫想せし見惑なり、佛道本論、どうぞ然り、過去の心は既に謝し、未來の心は未だ生せず、現在起り居る心は、果して何物を、清淨心なるか、將た染汚心なるか、染汚心の中にも、貪欲心あり、瞋恚心あり、愚痴心あり、憍慢心あり、疑惑心あり、何物の心ぞ、而してこの現在心、何處より相續し來りて、何處に滅没去るや、その蹤跡を、探求するに、不

〇現在心
不可得

〇過去二
心不可得

可得なり、現在心不可得なれば、過去心も未來心も不可得なりとす、斯の如く、憶念信解すれば、一切の顛倒妄想を、出離するなり、或は三界唯一心、心外無別法、又は十方佛土中、唯有一乘法、等の文を、讀誦解了去て、如說修行するは、教者なり、而して法は、本來一味平等なりと雖も、心は、元來一如平等なりと雖も、無始の蒸習に由りて、根に利鈍機に勝劣の差別を生ず、佛は、その根、亦隨ひ機、應し漸次、修行去て、法の源底を極め、まむ、このもろ、利根勝機の人、は大乗の法を得る、鈍根劣機の者は、小乗の法を得る、喩へば、大海の水を、汲ひに、手を以て、汲めば、それ相應の水を得る、大桶を以てすれば、それ相應の水を得る、如きなり、教者は、その大乘小乗の經論を、讀誦解了去て、漸次に、翻迷開悟、斷惑証理、凡夫より賢聖に進みて、生

〇大小兩
乘由來

〇教者眞
修行

死解脱を得るなりろの行相は宛も大海に入るに淺より深
ききに至り深きより深き入りてろの海底を極むる如き
なり

○禪者眞

修行

雨田曰教

禪並是得

道要法頓

漸超迂唯

在機契否

○變成男

子

然るに禪者の修行は教者より一段超越して法相名目依
らす直ちお自己本來の面目を看破して無量の生死を一刹
那に透脱し無邊の妄想を幕直に打破するなり喩へは海中
に直ちに飛込むて源底を極むる如し故に禪者は接群の機
に非らされば利益少なし不惜身命も修せされば利益少
し知識の垂示を待て漸やく右に顧み左に顧みる様ふては
覺束なし女人ならば直ちよ變成男子せされば單刀直入の
機に覺束なし變成男子ては形や根を變するにあらず大
丈夫の氣概を具するを謂ふなり又俗人ならば孝悌忠信を

○禪者決
心

行ふべきは本分なり然れども孝悌忠信のみにては人間世
界を超過するを得ず又初中後夜精勤修習少欲知足は僧
侶の本分なり然れども初中後夜精勤修習少欲知足のみに
ての有漏世界を出脱するを得ずこのもゑに眞正の禪者
たらむと欲せば丸ごし自己全軀を法となし以て三世の
諸佛と同一如お悟らむと思ひ歷代の祖師と同一轍に修せ
むと思ひ一切の菩薩と同一相に行せむと思ひ而して法お
あらされば一歩も行かず法にあらされば一手も動かさず
法にあらされば一言も出さず法にあらされば見ず聞かず
と誓願して一切みな法に皈投して大悟徹底する境界の實
に旨詮の及ぶ所にあらず文字の示すべき所にあらず即ち
教外別傳不立文字以心傳心なるべし然れども單に教相は

〇經論叢
視

學ぶに足らずとして、禪者動もすれば楞伽の不説二字亦不
已説亦不當説の語や、大般若の我從成道已來不説一字の文
や或は徳山の疏鈔を焼却し、且つ三日に一回堂を捜るとき、
凡そ文字を見れば即時に焼却せし等の經卷祖録を丸呑小
誤信まて、惟口を徳山に籍りて教相を指斥せむとするは、
後學を禽獸の域に驅るの所爲なりとす。若し若れ禪者に
して教相を要せずと云は、彼の在世に捨花微笑の時正法
眼藏涅槃妙心を傳へたまへる禪家の大初祖たる迦葉尊者
は何故に三藏を結集せまや、若し此等の三藏無益ならば、迦
葉尊者は何る自ら鍵槌を擧て諸大羅漢の入滅を制し、三藏
を結集せまめて後代に傳るや、且つ古來教相判釋に依て諸
法を覺知し、眞理を解了する媒介と爲し生死解脱する者勝

〇三藏結
集

雨田曰好
譬喻

けて數ふべからざるなり、嗚呼彼の輿馬に駕る者を見ずや、
足勞せずして千里を致すを、又た彼の舟楫に乗る者を見ず
や、手遊せずして江海を渡るを、まことに教相文字の學佛者
の輿馬なり舟楫なり、この故に一室を出てずして古佛の宝
訓を千歳の下に聞き、凡案を離れずして古聖の妙範を万里
の外に見るとを得るは、文字の賜物なり、况や之れに依て生
死解脱の要道を得るの媒介となる乎、於てをや、最も喜ぶへ
きとなる乎、我が禪宗は教外別傳不立文字なれば初めより
實卷赤軸は悉く無用なりとて、漫りに佛祖の妙典を破滅
する等は、大謗法罪に去て恐るべき事なり、古來禪門に遊ひ
て有爲活達の學士輩出せる少なからざるも、また邪魔外道
の徒に墜墮せるもの多し、されば一休和尚の物語も、世の

〇文字功
徳

洪嶽曰殺
人刀活人
劍

〇教禪併解

中にあふなきものは二あり門徒坊主に禪の在家と世の禪門と遊ぶ者豈に深省せざるべけれむや斯の如く論を來れは世間妄想の輩は必ず我相と相應せざるめて、只任禪者は頓機にして勝れ、教者は漸機に劣れりと思ふべけれども、然らばならず、教者と雖も利根頓機は禪者より譲らず禪者と雖も鈍根劣機は教者に及ばざるなり、况や世尊在世にはこれは教者かれは禪者なりとの區別はあらざりて、唯後世に及びて禪者の坐禪を專とし、教者の經論を專とするより、自然二途に別れたる者に似たり、然るに悲ひかな、教者は坐禪を修せず、禪者の教相を學ばず、斯の如きハマこと、に眞正の法器にあらず、さるからに古人は言へり、觀ありて教なきときは則ち殆く、教ありて觀なきときは則ち暗々、暗證の禪

〇教禪備廢

洪嶽曰禪教兼備猶龍雙翼

〇天台三種止觀

師は無教の觀より出て、文字の法師の無觀の教より出つども、おこれ眞成の法器とするに足らざるなり、とられ然り、教禪二門は學佛者の要道よ、去て偏廢すべからざるなり、彼の教相の大家たる天台大師を見ずや、初めて南岳大師に參禪して、三種止觀の名義を傳へたまふと雖も、証の他に由て悟らすとて、誠の自証は言を離れ義を忘れて、覺悟する所あり、之を佛祖不傳の妙と云ふなり、さてこの天台の南岳より傳へたまはるる三種止觀とは、適ち漸次止觀と不定止觀と圓頓止觀と是れなり、第一は漸次止觀とは歸戒禪定等の淺き法門より、漸次にもろくの法門を觀察して、實相の妙理を証得するに在り、第二は不定止觀との淺き法門も深く觀察し、深き法門も深く觀察して、遂に實相の眞理を覺悟

〇三種止
觀同一醜

するふあり第三の圓頓止觀とい初めより淺深の法門より由
らす直ちに實相の極理を觀察して優劣証悟するに在り、こ
の三種止觀は三根性を収むるが爲に其の行相を分別すれ
ども同玄く是れ大乘同じく是れ實相圓極の止觀にして漸
次と云ふと雖も或は一日一月一生にして無生忍を得べき
の妙行なれば其の行體固より圓頓止觀と別なるものにあ
らず不定止觀も亦た例して去るべしさてまた三種止觀は
即ち四種三昧に過ぎざるなり四種三昧とい何ぞや曰く常
坐三昧曰く常行三昧曰く半行半坐三昧曰く非行非坐三昧
是れなり此の四種三昧は實に天台一家の建立する所一代
聖教に説く所の無量の行法收め尽して洩すものない故に
天台大師御臨終の時門弟子に遺言して曰くこの四種三昧

〇四種三
昧

〇第一常
坐三昧

〇第二常
行三昧

〇第三半
行半坐三
昧

〇第四非

は是れ汝が明導なりと而して四種三昧を詳論せば第一の
常坐三昧とは誦經念佛行道禮拜等を雜へず端坐して専ら
諸法無碍法界平等の眞理を觀察する者をして、支殊門支殊
説而般若經に出だす所なり第二の常行三昧とい始終行道
して唯阿彌陀佛を専念し住立坐臥することを爲さる者に
して般若舟三昧經に出だす所なり此の二種三昧は九十日を
以て一期となす第三の半行半坐三昧とは法華方等二經より
出だす所に於て誦經禮拜行道坐禪を兼ねる者をして而して
法華は三七日を一期とし方等は摩訶祖持秘要陀羅尼を唱
念して滅罪を祈り滅罪の好相を現するを一期となせば滅
罪の好相を現するは行者の功力と罪業の多少とに由て遅
速あれば時期を限らざるなり第四の非行非坐三昧とい誦

行非坐三
味

〇天台正
依法華三
味

〇天台大
師三昧發
得

〇慧思禪

觀音等の諸經に出だす所にして、全く隨自意の行法なれば、
前の三昧との異なりて、行住坐臥、語默作々、善惡無記の心の
起るに任せて觀察するものとす、然るに四種三昧の中、付
て尤も天台の正依とせる法華三昧に有相無相の二行を論
ず、其の有相の行と、法華に曰く、受持讀誦法華經者得見我
身甚大歡喜轉復精進以見我故、即得三昧及陀羅尼とされば、
天台の初め大蘇山に上り慧思禪師に謁玄一心三觀の旨を
傳へ、且つ法華三昧有相安樂行を修去、二七日を歴て藥王品
の諸佛同讚の文なる是名眞法供養如來の句に至て豁然と
して大悟せられたり、已來經論の深義に於て日月の上天に
明かなる如く、清風の空中に在て碍る所なきが如く、縱說橫
說自由自在なり、この天台の師たる慧思の北齊の慧文禪師

師悟道

〇惠文禪

師得道

〇觀普賢
經語

に三觀の奥旨を傳承去、法華三昧を修去て位六根淨に登り、
この慧思の師たる惠文のまた龍樹大士の大論の三智實在一
心中得の文、及び中論の因緣所生法、我說即是空、亦名爲假
名、亦是中道義の語に因て、一心三觀の妙旨を啓發せられた
り、此の如く、教家の止觀三昧は、或の知識に因て見知去、或は
經論を讀誦解了去て悟解証得せらる、而去て根、利鈍障に
輕重あれば、悟入に遲速なきにあらず、故に經に曰く、心々相
次、不離大乘、一日至三七日、得見普賢、有重障者、七々日後、然後
得見、復有重者、一生得見、乃至如是種々業報不同、是故異說と
當さに知るべし、業報不同に因て三七日に普賢を見て三昧
及び陀羅尼を得、乃至一生に去て普賢を見て三昧及び陀羅
尼を得ることを、これ即ち無始薰習に因て利鈍の差別生去て、

〇教禪二
家三昧異
同

而して利根の機は頓悟し鈍根の機は漸悟するの理なり、然るに世の佛學者は動もすれば誤て禪家の三昧と教家の三昧と同一の如くに謂へり、勿論大悟徹底の境界即ち内証自得の場所に至ては、教禪二者全く差別なければども、禪家の三昧と教家の三昧との自然の趣きを殊よせるを知らざるへからず、されば教家の三昧は念佛誦經禮拜行道等の有相行より無相の眞理に証入する者おして、禪家の三昧は念佛誦經等の諸事を放捨し、善惡を思はず、是非を管せず、心意識の運轉を停め、念想觀の測量を息むる無相行より無相の眞理に直入するなり、かく云へば教者の必ずいとおむ、我が家にてても常坐三昧の時には念佛誦經禮拜行道等を爲さず、唯法界實相を觀念するあり、又た一心三觀の時にも三諦の境を

〇教家有
相三昧

〇禪家無
相三昧

縁すと雖も、漸やく觀念純熟すれば、能所を亡き境智冥合して、全く無念無想無言無說無思量底の境界に出脱して、生佛の假名を絶えたる眞如の宝塔に至るを目的とす、此の目的に至ては禪家の念佛誦經等を修せず、單に無相行を修すると更し異なるとなし、とこれ或は然らむ、然れども斯の如き細密なる法理に至ては、學佛者の考一考して能く觀察せざるべからざるなり、要するに教家の常坐三昧も一心三觀も皆初めは必ず能所に歴て、或は法界を念し、或は三諦を觀するにて禪家の三昧の如く、初めより能所を亡し、直指人心見性成佛せしむる頓法にあらず、百丈章云、僧問如何是大乘頓悟法門、師曰汝等先歇諸緣、休息万事、善與不善、世出世一切諸法、莫記憶、莫緣念、放捨身心、令其自在、又六祖章云、汝若欲

〇六祖章

〇百丈章

〇坐禪解
釋
洪嶽曰、同
中異、異中

知^シ心^ト要^ナ但^ダ一切^ノ善^ヲ惡^ヲ都^ラ莫^ク思^ハ量^ス自然^ニ得^ル入^リ清^ク淨^ク心^ヲ心^ヲ跡^ヲど^ルれ然^ル
り眞正の禪者たらむと欲せば、法界とか、三諦とかいゆる名
字言辭は勿論之を觀念する思慮分別も悉く亡絶して自己
の全跡を法と爲し、直ち又本來の面目現成すべきなり故に
眞正の禪者は利根勝機の人ならずは覺東なま、余がさきに
知識の垂示を待ちて漸やく右に顧み左に顧みる操おては
覺東なまと云へるは是れなり、然るにまた世の佛學者は動
もすれば彼の達磨の九年面壁端坐せる儀相に隨へて、坐禪
と名けたる者よして、教家の常坐三昧と同一なりと聞へり、
こはるも大なる誤解に去て、禪家の謂はゆる坐禪の坐は四
威儀の坐に非らず、若し行住臥お對する坐にて坐する禪と
云ふとなれば、教家の常坐三昧と異なるなし、禪家の坐禪と

同、
雨田曰、坐
禪解釋最
得要領、

〇頓漸解
解

ハ。禪。ハ。坐。す。る。と。云。ふ。と。に。し。て。法。華。の。謂。ハ。も。る。虛。空。を。以。て。
坐。と。す。と。云。へ。る。如。き。意。お。て。禪。者。は。自。己。の。起。居。動。靜。語。默。作。
々。見。聞。覺。知。の。微。細。お。至。る。ま。て。皆。禪。法。と。し。て。此。の。禪。法。よ。坐。
す。る。を。謂。ふ。なり。是。の。外。に。坐。禪。な。る。もの。な。き。なり。是。お。於。て
か。世。の。具。眼。者。は。教。家。の。禪。と。禪。家。の。禪。と。の。異。同。を。詳。密。に。觀
察。し。て。辨。知。せ。ら。る。へ。き。なり。
然るに上の如く論斷し來れば、先おも云へる如く世間妄
想の輩ハ必ず我相と相應せしめて、禪家の禪は頓法にして
勝れ教家の禪は漸法に去て劣なりと思ふへけれども、其は
亦た大なる僻解お去て、禪家の禪如何ハ頓法なるにもせよ、
已れ鈍根劣機なれハ頓悟するに由なし、教家の禪如何に漸
法なるにもせよ、已れ利根勝機なれば、三、七、日を期せず、天台

〇解了興
悟道相述

兩田曰解
之於悟猶
儒知者與
仁者知者
利仁仁者
安仁其徑
庭易知

大師の如きは二七日にして能く豁然大悟せられたり而して余は今次手なるを以て世人の往々誤て解了と悟道とを混同せるを辨せむとす勿論此底の文字は時としては互用する場合もあるべけれども實際解了と悟道との殊別なるとを知らざるべからざるれ解了とは俗に合点といふにて即ち真如とか法性とか菩提とか涅槃とか其他種々の法相名目の意義を合点するを謂ふなり而して能く法相名目の意義を合點し口に説き身に行ひつゝありと雖もその法相名目の源底たる真理の實際に至る未だ分明ならざるなりその分明ならざるの無明煩惱の障覆せるを以て之を打破せむ爲めに坐禪工夫して修觀純熟すれば初めて日の烟霞を出てたる如く月の村雲を離れたる如く昭々として一

〇孔子悟
道

〇孔子解
了

点の疑感なく障碍なく全く自心と真理と相應せる境界を悟道といふなり之れを世間に例して言はば即ち孔子の七十にして心の欲する所に従ふも矩を踰へざる境界なり此の境界は孔子七十にして全く自心と人道と相應して之を天地に建るも悖らず之を鬼神に質すも謬らず之を千古に推すも逆はず之を万世に貫くも動すへからざる場所に謂ひゆる悟道なり然るに孔子は十五にして學に志さし三十にして立ち四十にして惑はずなど言はれたる如く初めの仁とは如此義といふ如此忠とは如此孝とは如此天命といふ如此等と其の意義を合点解了して日々夜々に修行せられたるは遂に其の道の大悟徹底せられたるなりこれを以て知るべし解了とは合点するとあて未だ全く真理

○偽稱悟道家

○解了與悟道之難易
洪嶽曰反

と相應せざる境界なるを然るに今時世間に悟道家ともては、や、さ、る、者、を、見、る、固、より、口、高、尚、の、法、を、稱、へ、才、辯、滔、々、能、く、經、卷、祖、錄、を、も、説、示、す、と、雖、も、退、て、其、の、行、を、省、み、れ、ば、或、の、名、利、に、惑、ひ、五、欲、に、溺、る、も、の、比、々、皆、是、れ、な、り、眞、實、の、悟、道、家、な、る、も、の、果、し、て、斯、の、如、き、歟、余、は、未、た、佛、教、中、に、見、聞、せ、さ、る、所、よ、し、て、甚、た、不、審、に、堪、へ、さ、る、な、り、嗚、呼、今、時、世、間、に、悟、道、家、と、稱、す、る、者、は、解、了、家、に、し、て、決、し、て、大、悟、徹、底、の、人、に、あ、ら、さ、る、お、自、他、共、小、悟、道、家、と、許、し、て、増、長、慢、を、逞、ふ、せ、り、此、れ、に、因、て、之、れ、を、觀、れ、ば、禪、者、と、雖、も、小、悟、即、ち、解、了、は、易、く、教、者、と、雖、も、又、た、容、易、な、り、と、す、然、れ、ど、大、悟、徹、底、に、至、て、の、教、禪、二、者、共、に、難、し、と、す、る、所、な、り、た、い、教、禪、二、者、を、擇、ば、ず、聰、明、利、根、に、し、て、不、惜、身、命、に、修、行、工、夫、す、れ、は、悟、道、速、疾、な、り、と

○疑辭悉

○禪教頓漸假立分別
○頓漸二機遲速由

す、之、に、反、し、て、仮、令、聰、明、利、根、な、る、も、修、行、解、怠、な、れ、の、悟、道、の、愚、か、解、了、も、成、り、か、た、し、况、や、愚、味、鈍、根、の、者、に、於、て、を、や、仮、令、又、た、愚、鈍、味、根、な、る、も、勇、猛、精、進、に、工、夫、を、爲、せ、ば、必、ず、見、性、成、佛、疑、な、き、な、り、こ、の、も、ろ、に、禪、者、必、し、も、利、根、頓、機、お、ま、て、見、性、成、佛、速、疾、な、り、と、謂、ふ、へ、か、ら、ず、教、者、必、す、し、も、鈍、根、漸、機、に、ま、て、解、脫、得、道、遲、緩、な、り、と、謂、ふ、へ、か、ら、ず、果、て、然、ら、ば、讀、者、の、何、か、故、に、本、章、の、初、め、に、禪、者、の、頓、機、よ、し、て、成、佛、速、な、り、教、者、は、漸、機、に、し、て、解、脫、遲、な、り、と、言、ふ、や、の、疑、惑、の、起、る、な、ら、む、こ、の、疑、惑、一、應、は、然、な、り、再、應、は、否、す、何、と、な、れ、は、一、の、他、經、卷、に、依、ら、ず、直、お、本、來、の、面、目、を、看、破、す、る、の、工、夫、な、れ、の、見、性、成、佛、速、な、り、と、謂、ふ、も、可、な、り、又、た、一、は、他、に、依、て、漸、や、く、本、性、の、妙、理、を、反、照、す、る、の、修、行、な、れ、ば、解、脫、得、道、遲、な、り、と、謂、ふ、も、敢、て

來

不可なきなり、然りと雖も斯の如きは修行方法の上より斷
斷きたるまでにして、實際に自他平等法界同躰の境界に超
脱するの蓋し教禪二者未だ何れを速とし、何れを遅とする
を識らざるなり

〇千態万
狀之機

試みよ思へ、一切衆生の心性は都呂一平等なるも無始無習
小因て種々區々なる性情を作り出たすとを、その性情の異
なるに隨て、好樂するともまた種々様々なりとす、且らく人
中の如き、文華を好むあれば質朴を樂むあり、鬪諍を樂むあ
れば和順を好むあり、暴戾を好むあれば温良を樂むあり、
その他廉潔を好み、貪欲を樂み、辯才を好み、靜默を樂む等千態
万狀なり、その如く學佛者にも坐禪を修して深智を樂み、教
相を學びて博智を好むの二機あるなり、而して、二機の修行

〇樂深智
好博智二

機

方法別なり、と雖も、唯一の眞理を、証し、方法の事相を覺し、一
切、種智を成し、涅槃の妙果を期するは敢て異なるなきなり、
之を要するも甚深なる眞理を証するに、坐禪お由るべし、
廣博なる事相を覺するには教相も籍るべし、古人言へるあ
り、平等智は証し易く、差別智は明めがたし、と嗚呼それ眞正
の佛者たらんと欲せば平等差別事理二法に通達して上求
下化の大目的を成就すべきなり、果して然らば眞正の學佛
者は教禪双修せざるへからざるなり、然るも悲ひかな近古
以來、教禪双修の大徳躍出せざるのみならず、眞個の教者も
出てず、純然たる禪者も現れず、況して方今に至ては眞實に
佛法を修學するもの日一日より減却して、遂には年少の僧
侶は本分なる佛教研究を忘れて、異教異學に汲々たる者咸

〇教禪双
修

〇今時僧
侶、違越罪

雨田曰、誓
誨諄々、最
見親如

〇荆溪禪
師誓語

な然なり世尊言はすや、現有佛教於佛教中、未精研究於異道
論及諸外道精勤修學、是名有犯、有所違越、嗚呼世尊の教誡
斯の如き、いやしくも真正護法の大士は、世尊の教誡に違越
して可ならむや、語を寄す真正護法の大士よ、此の世は無常
なり、たどむ百年の生を保つも、半ば睡眠の爲めに消し、其の
他、時々、飲食、節々の更衣、かよひ剃浴、便利師友の病惱、親眷
の弔訪等種々雜縁あるまゝならずや、而してその餘す所の光
陰、果して幾何そや、斯の如き短日月に處して、修學すべき教
相夥多あり、工夫すへき公案、抄少ならざるなり、徒らに世の
風潮に惑溺し、而して異教異學に奔走して、無上の正法を研
厥することを忘る、勿れ、噫、天台第六祖荆溪禪師云く、今運居、
像未隔此、眞文自非、宿種妙因、誠爲難値、と實は是れ心膽を玄

て寒からしむるの誓戒ならずや、

願以此功德、普及於一切、我等與衆生、
皆共成佛道。

破邪 純正宗教論終

附

錄

○異端辯妄

蠢々たる万靈の中其の最も靈たるものは人なり。天地も此の人に因て其の徳を著はし。四時も此の人に因て其の序を違へず。陰陽も此の人に因て調和し。日月も此の人に因て照臨し。山川草木も此の人よ因て發育暢茂し。禽獸蟲魚も此の人に因て各々其の性を遂く。人は實よ万物の長たり。古今の成敗も此の人に因て明かに。國家の隆頽も此の人に因て分かる。人は實に不測の靈徳を備ふ。此の靈徳外に著はれて五、常、と、なり。五、典、と、なる。其の五、典、は五、倫、の間に於て行はる。則ち君臣義あり。父子親あり。夫婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。とは是なり。されば君は臣を仁愛し。臣は君を敬忠し。父は子を慈み。子は父に事へ。夫は妻を率ゐ。妻は夫に順ひ。長者は尊み。幼者は恵み。朋友は互に信誼を操りて。只任天命お遵ひ。人事を盡すべし。人事を盡すが故に富貴なる

も驕らず。虞舜の天子と爲りて喜ばざるが如くなるべし。天命に違ふが故に貧賤なるも愛へず。顔子の陋巷に在りて悲まざるが如くなるべし。夫れ唯天命に違ひ人事を盡す是の故に此の世の苦樂窮達に心を攪惱せず。惟道を之れ行ひ惟徳を之れ施す。一家斯くの如くなれば一家の幸福となり。一郷斯くの如くなれば一郷の幸福となり。一郡一縣斯くの如くなれば一郡一縣の幸福となり。天下咸な斯くの如くなれば天下の幸福となる。幸福とは何ぞや。人の此の道徳を遵行するが故に。天地之れが爲に感應えて。陰陽相調ひ。風雨相和し。日月清明。草木繁茂し。五穀豐饒に。慶雲彩霞山川を繞りて。月に不祥の天災なく。歳に不虞の地變なく。天下太平四海安穩。燕の空中に翔けり。魚は水上に躍り。百蟲は叢間に吟し。群獸は藪澤に戯れ。覆載の物一として其の情を遂げざるはなく。見るもの聞くものとして喜ぶへく。樂むへからざる

るは無きを謂ふ。古の謂ひも亦國家將事に興らんとする必ず爾群ありとは是れなり。」

然るに彼の浮圖の教法は全く之れに反し。倫常の至道を放棄して。只清淨寂滅の道を欣求す。遂に祖家を出て山林に入りて。君臣の義を廢す。父子の情を斷し。夫婦の愛を滅す。長幼卑尊の別を紊り。朋友信誼の交を絶つ。故に廟堂の上に立ちても。天下の安危を顧みることなく。農工商となりても。其の職を務むることなく。漫りに荒唐孟浪の語を拈りて。百姓を誑惑す。億兆の膏血を集めて。金殿玉閣を築き。種々の偶像を崇奉して。現在の冥福若くは未來の果報を祈り。其の甚しきに至りては。頂を焚き。指を燃す。臂を斷ち。身を縛り。以て三寶の供養と稱す。嗚呼斯くの如きは。實に中華の風を傷け。人間の俗を敗るものなり。況や王侯將相の一たび此の法に感溺するや。億兆の上たる威嚴を忘

れて徒らに三寶の奴と稱ふ。身を投て財を捨て、以て種々の供養を營む。是を以て天下の政道弛み綱紀廢れて。上下惑亂し百姓流亡す。一人斯くの如くなれば。一人の不幸。十人斯くの如くなれば。十人の不幸。百人千人乃至全縣舉國咸斯くの如くなれば。天下國家の不幸之れより大いなるはなし。不幸とは何ぞや。倫常泯滅し風俗壞亂し。國勢頽廢。去て乾坤之が爲に。暗暎日月之が爲に。晦曠陰陽之が爲に。否塞風雨之が爲に。不順。迅雷烈風。天變地妖。並び起りて。五穀凶耗。饑饉連歲。疫癘四方に流行。去て。百姓困窮するを謂ふ。古に謂はゆる國家將に亡んとする必ず妖孽ありといはれなり。」

嗚呼彼の浮圖何者ぞ夷狄の人なり。彼の教法何者ぞ寂滅の道なり。嗚呼浮圖の害楊墨小勝る。楊子の偏愛未だ父子の親を廢するに至らず。墨子の兼愛未だ君臣の義を滅するに至らず。然るに浮圖は此の二の

者を破壊滅絶せり。嗚呼宇内萬國廣々と雖も。父なきの子なく君なきの臣なし。一家の主は父も非すや。一國の主は君に非すや。然れば則ち國と家とは君と父とに由りて存す。未だ君父を滅絶して而して國家あることを聞かざるなり。若まうれ君父なきの國家あらば。其は禽獸の集合のみ。人類の社會には非ざるなり。嗚呼彼の浮圖は倫常を破壊。去國家を滅没して。殆ど禽獸の境域に陥れんとせり。嗚呼今の世お生れて能く言て浮圖を禦ぐ者は。聖人の徒たりと叱咤絶叫せるものは。韓歐二子是れなり。朱儒諸子も亦威な力を極めて我が佛教を排斥したり。即ち異端寂滅の法。法は高尚なりと雖も。治國の實用に益なく。却て倫常を賊害せりとは。周程張朱等の言なり。且我が國古來の碩儒と稱せらるる程の者。概ね韓歐二子の餘唾を嘗めて。以て我が佛教を破毀し。程朱諸子の吻沫を拾ひて。以て我が佛教を罵詈。其の罵詈破

毀せざるものは俗儒とて眞儒に非ざるものと爲せり。嗚呼斯くの如きの風習は、玆に幾百有餘の長星霜を經過去來れり。然りとていふも、我が佛教は、日月の宇内に照臨する如く、眞理の光明は高く俗論の上に赫灼たり。嗚呼夫れ法を千古に考へ教を萬世に傳ふる者は宜しく少しも愛憎偏黨の心なかるべし。否らざれば已れの愛する教は金玉の如く已れの憎む法は土塊の如く見ばて必ず此れに偏すれば彼を廢し彼れを黨すれば此を捨て、遂に其の教の本旨たる中正の道を失ひ眞實の理を暗まて固陋頑愚の謬見に陥らむ。書に曰く無偏無黨王道蕩々と王道とは即ち儒道なり。法花に曰く佛觀一切無有彼此愛憎の心と。大論に曰く佛法無偏黨と。宣なる哉儒佛二教とも其の本末に至りては必しも愛憎偏黨の心なきこと果して然らば愛憎偏黨の心を以て漫くお佛は異端なり儒は外道なりと言ふものは却て

儒者にして異端たり佛徒にして外道たるを道れざるべし。嗚呼我が佛教の眞理は韓歐二子の未だ知らざる所なり。宋儒諸子の偶々佛典を播くも亦未だ其の眞理を覺らざる所なり。請ふ試みに其の理由を陳辯せむ。

るれ天地は廣し万物は多し。之が大道眞理を詮顯する宜きく千差萬別を盡すべし。千差萬別を盡すと雖も將た一定不變の大道眞理に吻合せざるべからず。若し吻合せざる者あらば異端なり外道なりと言ふも敢て不可なす。然り而して儒佛二教の成立に於ては互に逕庭あり。即ち一は解脫を要とて治國を専とせず。又一は治國を専らとて解脫を要とせざるなり。然りと雖も此の二教は共に万世不易の大道眞理の在るありて此の二教の徳用は宛も天地の如く日月の如く夫婦の如く兄弟の如く。一日も相離れ相背くべからず。却て互ふ

相依り相扶けて。以て人心を安樂に。去國家を泰平にすべし。然らば則ち佛敎は何故に解脱法を説きて治國の道を教へざるや。曰く我が佛敎とても治國の道を教へざるには非らず。然れども其の治國の道の如きは。各々其の國土の風俗時勢に隨て。宜きを制して治めしむるものなり。謂はゆる國土よは華あり夷あり大あり小あり貧あり富あり強あり弱ありて一準ならざれば。之を治むるの法も亦千變万化なるへからず。故に佛の之を世間の法として。世間の因縁法に任せ。自己高く其の上に出ぬけて。別に出世間の法を開きたるなり。此の出世間の法の大道の究竟にして。謂はゆる生死を離れ。有無を超へたれば。勿論彼我もなく。怨親もなく。直に大道の當躰なり。法花經に。今此三界皆是我有。其中衆生。悉是我子。と曰へる。是れなり。されば是の道は國の文野を問はず。時の古今を論せず。貴となく賤となく。長となく幼となく。

く賢も愚も男子も女子も。皆共に修行し得へきなり。若し是の道を得たらむには。一切の我慢我見我執我相の固より。有無の惑生死の迷まで。奇麗に斷じ盡くえて。混然たる大道の當躰に歸入するが故に。君お對するときは。勉めずして忠となり。親お對するときは。思はずして孝となり。一切衆生に對するときは。法爾として大慈大悲となりて。自心他心を安樂にし。他身自身を利益し。福德を増長し。國土を莊嚴するなり。是れ世間の法と迥然。其の趣を殊おして。而して世間の道と混然。其の歸を同らする所以なり。

論者眼を開いて彼の姬周を見よ。文武周公の雨に浴し風に櫛りて。其の業を創め。成康昭穆の華々として。其の治を圖り。文武禮樂の法備はらざるなく。仁義忠孝の敎明かならざるなし。然れども累世幾許ならずして。天下漸く乱れ。中外蜂起し。天下瓜裂し。遂に孔顔等の聖賢は卒

土に奔走して屈勉力を竭すと雖も之を救ふこと能はさりしを如何せむ。又桓文管晏の明賢は終日乾々身を致すと雖も之を平くること能はさりしを如何せむ。然るに秦始皇祖の一たび崛起せるや容易に之を得たり。此の輩固より孔顔思孟否桓文等より其の道の精なるに非ず。其の徳の大なるも非ざるなり。果して然らば國家の治乱天下の興敗は法の能く制し得へきに非ざる歟。將た人の能く治め得べきに非ざる歟。亦彼の魏相丙吉趙廣買誼の徒は威な賢明なりと雖も天下漸く騒然たるを如何せむ。將た亦孝元の太子たりし時性柔仁にして志常に儒を好む。當時宣帝刑名を以て百姓を細す。嘗て燕する時從容として言く。陛下の刑を持する太だ酷なり。宜く儒生を用ひて仁政を施すべし。と帝色を作して曰く。漢家自ら制法の在るありて常々霸王の道を雜む。之を奈何ぞ純ら徳教を任して周政を用ひひや。且儒生

は多く時宜に達せず。好で古を是とし今を非とす。而して徒らに蒼生を惑亂きて國家の衰頽を來たす。之を奈何と委任するに足らむや。嗚呼我が家を乱る者の汝ならむと欺せしむ非らずや。蓋し儒は君子あり小人あり。小人の儒は置て論せず。君子の儒に至りては天下を経綸玄三代の治を致すこと敢て難きも非ざるへけれども。悲哉天下は常に小人の位を占め權を弄すること多く。爲に賢者も其の位を得ず。去て之を行ふこと能はず。能者も其の職を得ずして之を施すこと能はざるを如何せむ。又彼の蜀漢の時昭烈の仁諸葛の智關羽の勇ありて。而して兵利ならざるに非ず。國固からざるに非ず。政整ひざるに非ず。然れども土廣むること能はず。戰勝つこと能はざり。法を如何せむ。果して然らば仁と雖も智と雖も勇と雖も國家を治御すること能はざるもの歟。將た聖と雖も賢と雖も亦天下を平定すること能はざる

もの歟。將た亦天道の善に福し、惡に禍せば、何が故ぞ昭烈諸葛關羽若くは魏丙趙買若くは孔顔思孟の意を照鑑して、治國の目的を達せしめざるや。將た亦何か故ぞ充來奸惡なる小人位を得て權を恣に去賢明なる君子は却て崎嶇艱難の禍に遭ふや。將た亦何か故ぞ天下は乱多く去て國家の治少なきや。天道は是歟非歟。是に於てか究竟の大道至極の大法の必用を感するなり。

夫れ我が佛教は究竟の大道至極の大法なるが故に宇宙の万法を總括して遺すことなく漏すことなき。則ち宇宙の萬法を總括去て二と爲す。曰く有情曰く非情是れなり。之を正依の二報と云ふ。正報とは且く人間に就て云はば、現今五尺の形骸なり。依報とは此の正報の所以となる國土なり。而去て正報に十類あり。曰く地獄。餓鬼。畜生。修羅。人間。天上。聲聞。緣覺。菩薩。佛陀。是れなり。之を十界と云ふ。此の十界の所依よ

四土あり。曰く同居。方便。實報。寂光。是れなり。我が佛教は此の十界四土の相性。勝劣。力作。因緣。果報。本末。究竟等の眞理を詮顯去て。大悟徹底せしむるに在り。然るに彼の儒家の教法は、十界の一部分たる人間界より止まり。四土の一部分たる同居土に限れば、儒教の格物致知は、我が佛教の一部分たるに過ぎず。其の一部分も未だ充分に覺悟すること能はざるべし。如何にとなれば、三世因果の正道實理を明解的説せざればなり。論者眼を閉ちて考一考せよ。佛教の謂はゆる此の世の貧富貴賤。苦樂窮達は、皆天に由ると稱すれども、其の天命の是非の判然せざるなり。天命若し是ならば、則ち天の命を賦する。奚ぞ貧は多く富は少く。賤の多く貴は少く。且賢者は窮苦し。小人は達樂することの多きや。苟も多少の分天に在りとせば、天何ぞ不公平の甚しきや。將た前より列擧せる孔顔思孟若くは魏丙趙買若くは昭烈諸葛關羽等の如き。有

徳守行家の貧賤にまて。却て不徳無行の者の富貴を極むるや。斯くの如きの則ち無道を興して有徳を喪せり。是れも亦皆天に由るとせば。天何ぞ顛倒の甚しきや。天命若し非ならば。尙書に謂ひゆる天道。福善禍惡の語や。伊訓の作善降之百祥。作不善降之百殃の言や。周易の天道虧盈而益謙の説は。悉く荒唐無稽に屬するに似たり。然るに往々前難を回護する者ありて。一應善を盡くすに似たれども。未だ翼を盡くさるるなり。其は坡翁が三槐堂銘に曰く。天可必乎。賢者不必貴。仁者不必壽。天不可必乎。仁者必有後。二者將安取衷哉。吾聞之申包胥。曰。人衆者勝天。天定亦能勝人。世之論天者。皆不待其定而求之。故以天爲茫々。善者以怠惡者以肆。盜跖之壽。孔顔之厄。此皆天之未定者也。松柏生於山林。其始也困於蓬蒿。厄於牛羊。而其終也。貫四時。閱千載。而不改者。其天定也。善惡之報。至於子孫。則其定也久矣。吾以所見所聞考之。其可必也。審矣。然る

に儒家小説く所を聞くに。人の靈魂は一世に泯滅するものとなす。果して然らんには。縱ひ榮華を其の子孫が享受するも。己よ於て何の益か有らむ。將た彼の夷齊顔冉の一生を貧困餓死お果たせまも。其の子孫の光榮なるもの果して何くよか有る。さるからば。大史公伯夷傳を作。夷齊の首陽山に餓死するを見て。天道是耶非耶。君子疾没世而名不稱焉。伯夷叔齊雖賢。得夫子而名益彰。と言へり。宜なるかな。大史公の天道の是非を疑へること。夫れ人の善惡を行ふの跡。輕事に非ざるなり。焉と身後の名を以て。之を償ふに足らむや。且天下の廣き。今古の氷き億兆の多き。經傳に載する所。史家の記する所。僅々千を以て計るよ。足らず。何ぞ其れ擧ぎや。後世に名の稱せられざる者。天道其れ何を以て之を賞罰せんや。然るに亦た夷齊の行跡を回護するものあり。是れも亦未だ善美を盡くさるるの説なるのみ。其の伯夷太公の二老は皆

文王に歸せり。其の後武王の紂を伐つに及びてや。一は之を輔けて紂を伐たしむ。是れ天下を救ふの意なり。一は之を謀めて周粟を食はず。是れ後世篡奪の臣を禦ぐの意なり。其の行跡異なりと雖も。二者並に行ひれて。天道人事を全ふする所以なり。若し夫れ天の夷齊を去て。逸樂を以て其の身を終はらしめば。則ち其の臣道を存する所以の者著はれず。是の故に天の之に待する甚だ薄き小似たるなりと。嗚呼何ぞ牽強附會の甚しきや。天若し意わらば。大いに迷惑すべからむのみ。嗚呼儒教の敬信する所は天なり。斯の道の本源は天より出づ。天の命するまゝに安心するが故に。君は君たらずと雖も。臣は臣たらざるべからずとの大義も行はれ。徳あり行ありて貧賤なるも。徒らに富貴を僭越せまとの名分も行はるゝなり。若し夫れ天道の是非判然せず。問を顛倒するものありとして。之を敬信せざるべき。忽ち大義名分の

道も破れて。西洋諸邦の如く。優劣敗弱肉強食の風俗も行はれむ。嗚呼危い哉。若し夫れ天道の是非を疑惑するの儒教の本意に非ず。只現今世間を行ふべき倫常を守ること。我が儒教の本色なれ。而して斯道の宇内萬國に絶てなき所にして。浮圖の夢も知らざる教なりと云は。其は井底の見にして。頑愚固陋と云はざるを得ず。もく。我が佛敎の起れる印度の。泰西諸邦の未だ野蠻の暗界に眠れる時。既に哲理の觀念。宗教的の志。想など。充分發達して。最高等の文明世界。小崛起したり。近時我が邦にてもてはやさるゝ。歐洲の哲學や。耶蘇教などは。脚下にも及ばざる高尙なる哲理的の宗教の。九十五種も之れあり。其の中。最も下等。に屬する。順世外道と云へるは。世間の常道に違背せずして。隨順するの法教にて。即ち世間の常道と。四民の。其の本分たる職業を務め。心懸を誠よし。品行を正う。玄言語を慎み。而

して親あるものは能く之に事へ。君ある者の能く之に仕へ。子ある者の能く之を訓へ。臣ある者は能く之を御め。夫ある者は能く之に従ひ。妻ある者は能く之を率ぬ。兄ある者の能く之を敬ひ。弟ある者は能く之を憐み。老者は之を安んじ。幼者は之を慈み。先祖の事を忘れず。親族朋友を疎せず。優者は尊み。劣者の侮らず。若し怒ることあるも其の度を誤らず。喜ぶことあるも其の守を失はず。受くまじき者は塵をも取らず。與ふべき者は國をも惜まず。色を好むも溺れず。酒を飲むも乱れず。人に害なき者は殺さず。常に攝生に注意して。男女大小貴賤貧富のく。其の分に安んじて。世間の風儀に逆はず。法律に背かず。今日は今日にして足り。今生は今生にして足る。此の他お道の求むべきなく。法の修むべきなしと立つるものなり。論者の斯くの如き教法をも我が道と異なり。其は異端なり。邪教なりと謂ふを得べき歟。修身齊家治

國平天下の教の備教のみに限らず。印度も業又已に開けたること斯くの如し。然るに我が世尊は是れ等の教法は勿論。其の他の教法をも悉く外道なり。邪法なりと喝破せられたり。固より此れ等の教法は世間の道として精しからざるに非ず。良からざるに非ず。是れを人事に用ひて益なきに非ず。是を天下に施して經綸治御せられざるお非ざるなり。然りと雖も未だ出世間の大道の眞源。大法の極理に達することを得ざるなり。爰に世尊は斯くの如き理窟。世界や妄想境界やを廻然獨脱して。天上地下唯我獨尊の位に坐す。故に其の獨尊の活眼より見來れば。眞實に九十五種の外道の法も。孔孟老莊の世間の教も。十方世界の法道も。洞然明白たること。猶芙蓉の第一壘に立てば。陽谷虞淵も。瀉澗山嶽も。渺瀟たる洋海も。絡繹たる村落も。一々遺す所なく。看破せらる。が如し。世尊の境界實に斯くの如し。故に世間に在ては

世間を利益し更に出世間に在りて、出世間の眞理に相應せしむること。是れ我が佛教の大目的なり。

世尊在世の時、饑饉ありて、世尊に食を供養する者なかりしかば、世尊は一日食具を廢し給へり。時に一比丘思惟すらく、今日こそ吾れ世尊を供養して、大いなる功德を得むと、遂に自から大衣を賣りて、食具を調へ、之を世尊に奉らむとす。時、世尊は憐愍に教誡して言はく、比丘よ、汝の袈裟は賣るべからず。假令之を以て佛寶に供養すとも、却て袈裟を賣るの法罪は深重にして、汝が身に利益なし。但父母貧窮の縁を除くと、嗚呼世尊の教誡斯くの如し。且世尊成道の後は、母后の爲に、初利天上に昇りて、出世の妙道を説き給ひ、亦父王葬送の時には、みづから棺を擔ひ給へり。嗚呼三界の大導師たる世尊の行跡斯くの如き。されば梵網經に曰く、孝順父母師僧三寶、孝順至道之法、孝名爲報、亦名制

止とありて、父母存生の時は、厚く之に事へ、而して父母愛念せば、甘露を飲むが如く、父母呵責せば、良藥を服するが如くして、毫も父母の志に反り、父母の恩に背くべからず。父母没去の後、は深く之を思ひて、終身父母の道を改めず、父母の志を守るべし。とは、世尊の遺誡なり。宜なる哉。其の遺教を奉ずる各宗の高僧は、咸な父母の孝養厚かりしこと。亦涅槃經の中に、大衆の世尊に問へることあり。曰く、世尊の今日金剛不壞の妙體を獲給へるは、何の因縁に由るか。と。世尊答へ給はく、我の過去生々の處にて、國家の正法を破壊し、民心を惑亂せる者を、誅伐せし。功德不由るなり。と。嗚呼、其れ國家の正法を破壊し、民心を惑亂せる者、その他に非ず。四恩を滅却せる不忠不孝の乱臣賊子、是れなり。我が佛教は慈悲行を本とすれども、四恩を滅却し、大義を惑亂すること、耶穌基督の如きものは、毫も藉す所なく、速に排擯し、盡くすべし。是れ取

て世間道も背かず。出世間道にも違はずと教ふるなり。されば我が
 佛教は出世間法を専とすと雖も亦世間の正法を護持すること斯く
 の如し。果して然らば佛者は何か故か父母を去り君主を辭し沙門
 出家となりて夫婦兄弟朋友の道をも放棄せるや。是れにても猶世道
 に違背せず。國家を利益すると言ふを得べきや。」
 曰く。これ出家といふ平たく言へば家を出づると云ふことなり。凡そ此
 の世に生きとま生けるものは威な形骸あり。形骸あるものゝ必ず所
 依あり。彼の禽獸蟲魚の如きも。各々其の棲居する所ありて存す。況や
 人間に於てをや。此の身の安居棲息する所なければ。雨露凌ぐべから
 ず。寒熱避くべからず。假令佛弟子となり沙門となるも。此の身の所依
 たる住家なかるべからず。其の住家は即ち今日の堂塔伽藍是れなり。
 されば古往今來の沙門てふものゝ。一方より觀れば出家なるも。亦一

方より言へば入家なり。沙門と雖も決て此の身の所依たる家屋を
 離るべからず。果して然らば佛教の謂はるる出家の家は敢て柱梁椽
 椽壁瓦甍にて建れる舎宅を云ふに非ず。若し斯の如き家を出るを以
 て出家なりとせば。古來放蕩無頼漢が主人の家を窮屈に思ひ。又は父
 母の家を不自由に想ひ。之を厭ひて出るものあり。又女子の如きは他
 り嫁する道ありて必ず父母祖先の家を出づ。又昔時太伯虞仲の如き
 伯夷叔齊の如き。皆祖先の家を出てたり。固より此等の賢聖は遺義の
 爲に出家せられたる者にして。後世晋の公子重耳の禍の我身に及ばむ
 ことを恐れて出奔去。衛の公子開方の親も倍きて出走せる如き。其
 の事跡別なりと雖も。均て父母祖先の家を出で去。相違なし。斯の
 如く世間に於ても出家せるの例枚擧ふ暇あらざれども。然れども沙
 門の大願を起して出家せるとは悉く異なるなり。則ち佛教の出家と

は此の身と此の心とを繋縛せる家を出るなり。唯現在の父母を離れ、祖先の舊宅を出づる如きは、これ事相の出家にて、乃ち真正の出家に至るの方便たるお過ぎず。而して其の真正の出家とは、無明の父母に離れて生死の舊宅を出づるの謂ひなり。決まて論者が籲想せる如く、沙門の最愛なる父母を棄て重要なる祖家を出でて、跡は野となり原となるとも意とする所お非すとする如き殺風景の者に非ざるなり。其の前も纏述せる如く、我が佛教は究竟の大道至極の大法を詮顯せる道なれば、曷ぞ人倫の最も重き君臣の大義を枉げ父子の至親に背くことを爲さむや。既に我が教祖の双親に竭玄玉ひて行跡を見ても、吾嘗感涙を催さるるを欲えて得べからざるなり。亦況や楞伽經淨名經五百問經等の諸大乘經には、父母聽さいれば出家すること莫れと醇々教誡せられたり。亦復父母の臨去を得て出家すと雖も、猶も

已に得度の時佛祖三寶に唱ふる誓願文あり。曰く、流轉三界中、恩愛不能斷、乘恩入無爲、眞實報恩謝。當に知るべし、沙門出家てふ者、固より俗情妄想の恩愛をこそ放棄すべけれ。遂には究竟至極の道法を以て眞實に報恩するものなるを、決して一度出家せば已に父子の縁の絶わたり。故に假令父母の艱難疾苦するも、楚越視するが如き不孝の道に非らざるなり。其はさきお世尊が一比丘の袈裟を賣らむとせし時の教誡よても、孝道を重せらるゝこと昭乎瞭然たり。かるが故に余、未だ嘗て佛教を奉せる沙門出家の父母に孝ならず親族に睦ならず國王に忠ならずざるものあるを聞かざるなり。勿論出家の身なれば、世俗の如く父母の膝下に在りて温清定省の事を奉せずと雖も、寧ろ其の神識の沈迷を拯ひて生死解脱せまひるの大孝を致すものなり。故よ明の永覺禪師の嘗て儒を學び年四十ふして出家と深く此の

義を推勘えて曰く。世俗の孝は其の情に順ひ。佛者の孝は其の性も順ふ。將た世俗の孝は其の形を資け。佛者の孝は其の神を資くと旨ある哉言や。勿論出家の身なれば。國君の政堂に立ちて政務の奉仕せずと雖も。寧ろ粉骨碎身以て四海の民を利益せ。深山を開き難路を通し。舟車を作り橋梁を架えて。國土を莊嚴するを以て大忠を致す者なり。論者斯くの如きにて。沙門出家は人倫を破壊し。君父を滅却。國家を毒害する者なりと謂ふ歟。蓋し論者は出家の文字を知りて未だ出家の出家たる所以を識らざるのみ。

嗚呼世尊の教法は大藏に朽ちず。祖師の訓誡は世間も絶えざれども。悲い憤心焉に在らざれば。視れども見ぬ。聴けども聞かず。一向に世俗の輩は五塵の情若く六境の心惑して。行住坐臥利を資り。語黙作々欲に奔り。終日晝夜墮惡の業を造り。沈苦の因を植うるのみにて。春の

花の嵐に散り。秋の月の雲に隠る。果敢なき風情も餘所に見做。去て我が身の無常なることを覺らず。武さ兵士も終ふ。鳥部山の煙となり。妍き美人も空く。化野の露と消ゆる。わじきなき有様は。匆々に看過。去て。更に我身の上も心付かず。悠然と去て常住の想を爲せり。偶々風善も催されて。富貴の身に生れ來れば。日夜淫酒を荒ひ。驕奢も耽り。老子の謂はゆる金玉滿堂。莫之能守。富貴而驕。自遺其咎に歸す。何ろ其れ省みざるの太甚さや。將た亦宿業の招く所。て貧賤の家に生れ來れば。朝には月を戴いて出て。夕には星を帯ひて還り。東西に奔り。南北に回りにて。貧を悲み富を欣ひ。禍を歎きて福を求む。何の過ありてか。生死透脱の要道を知じや。斯くの如き生死の常闇に彷徨耽着せる迷徒。無量無邊に去て。悉く醉生夢死に歸するもの。比々皆然らざるはな。去。爰よ沙門の斯くの如き可憐の群類衆庶を濟度せむと欲えて。則ち世俗

の最も断え難く離れ難き父母兄弟妻子眷屬等を割愛志。全く世間の名利五欲歡樂安逸を毒蛇惡蟲の如く放却きて。有漏五蘊の凡身を轉じ。以て無漏勝妙の聖躰となり。而きて後自在に我が行願を満足するものなり。譬へばみづから溺れては他の溺る者を救ふこと能はざる如く。俗界を濟度せむと欲せば已れ先づ俗界を出脱せざるべからず。沙門出家の道是に於て現起せり。

葛城尊者出家の相を説て曰く。沙門の賤きことなり。位なく官なき尊きことは人間天上の師位なり。此の貴賤相聞らぬ處に其の道有て存す。貧乏きことは資財皆念を絶す。富ることは万國の應供世間の福田なり。此の貧富相聞らぬ處に其の道有て存す。下等なること。邑里行乞の士。上等なることは梵王帝尺恭敬せり。此の上下相聞らぬ處に其の道有て存す。分小隨て。聖教を讀めば必ず。如説修行す。分に隨て法の

趣を知る。知れば必ず身口相應す。分に隨て必ず邪正を辨す。辨明すれば必ず邪を棄て正に歸すと是れなり。沙門出家は實に世間法を解脱して。道法を以て生命となす。衣食となす住所となし。法に非されば言はず道非されば行せず。法の外に自身なく道の外に世間なし。語を換へて言はば見聞覺知の境界も自身五尺の形骸も擧な法道よきて。此の法道は我が父母なり兄弟なり妻子なり朋友なり。惟摩經の謂はゆる菩薩は智度を以て母となす。方便を以て父となす。法喜を以て妻となす。慈悲心を女となす。誠實心を男となす。畢竟空寂の舍には四禪を牀座と爲す。六度の親友と四攝の妓女と互に法言を歌詠して以て之れを音樂となす。無漏の法を食となす。解脱の道を嚆となす。淨心を以て澡浴し。戒品を塗香となし。以て此の身と此の心とを莊嚴して。十方の國土に變現して。群類衆庶を饒益し。世間異道(外道波羅門等)の中に於て悉

く出家せまひるものなり。如斯きを我が真正の出家と云ひ又勝道沙門と云ふ。之に反して只外相に出家して剃髮染衣七佛傳來の袈裟を着すと雖も學解を怠廢し道德を忘却して徒らに四民を誑惑し木佛金佛を滅多無性に妄信せしめて。上は國王大臣より下は百官庶民に至るまで。各其の本務を忘れ其の職業を廢し。甚きに至りては頂上に燃燈玄臂上に焚香し。或は裸形斷食等の異行を勸誘して。國家の風俗を破壊去。一層甚きに至りては宮掖に親近して。遂に天下の政權を弄す。社會の秩序を紊亂するに至る。斯くの如き輩は實を尅して曰は「名に非れば利に非れば名否らされば眞個の佛教を知らざる佛名の外道にして。之を汚道沙門と云ふ。汚道沙門は吾曹信佛の徒と雖も。固より鑿鼓以て其の罪を讓むる所なり。蓋し韓歐諸子の當時よりは汚道沙門多かりしならむ。是れ韓歐諸子の排佛毀釋論の起れる所以に

して。敢て韓歐二子を咎むるに足らざるなり。然りと雖も不幸に去て韓子は湖州にて大顛禪師に遭ひて。聊か佛理を聴き少く感悟せり。亦歐子は明教大師の儒佛を論せる輔教箴を讀みて。僧中に此の老ありと歎せ去りて。止まりて。大顛明教等の勝妙沙門に就いて充分に佛理を研覈せざるが故に。自己の妄想を斷破して生死を透脱すること能はざりき。亦程朱二子の如きも。佛典を尋討せりと雖も。皮相の解了お止まりて。遂には異端寂滅の教は眞實に非らずなど、妄言せり。佛敎の謂はゆる寂滅とは眞理の極際にて。則ち五住見一切處住欲愛住色愛住無色愛住根本無明住の煩悩を寂して。二種分段と變易との生死を滅するの謂なり。決して寂滅とは此の天地國土も人畜蟲魚も悉く空々寂々も歸して滅無せざるへからずとは非ざるなり。此の寂滅の眞理を一分だに覺悟せば。天地の成壞も國家の興敗も。人事の吉

凶禍禍壽夭等も明に了にして既に前面に縷述せる所の如き。現在此身に悪なくしておのづから福し善なくしておのづから福し不仁にして壽不殺にして夭等ありて。大概天道を奉せる聖賢君子は窮苦艱難にして却て天命を恐れざる暴悪小人は多く榮達安樂お處する等の疑は底を拂ひて剷除すべし之を佛教より言へば引滿二業の所爲にして。則ち前生に敬慢の因あれば今世に貴賤の果あり。又壽夭の果は仁殺の因お依り富の施より來り貧は慳より來り。其の他智愚妍媸病健苦樂等は皆宿業の致す所にして此の宿業の現在に顯現し來れば容易に神佛も轉すること能はず天命も動かすこと能はずと斷す之を自業自得の因縁と云ふ之を要するに我が佛教は内は世間の萬法を圓融會通して大いに世間を利益し外は出世間の真理に參同究竟して高く出世間に超然たらまゆ而して天地陰陽も草木國土も有

情非情も悉皆成佛せしめて寂滅無爲の安樂を興ふるものなり。決て世の儒者の是非する如き疎笨の教法には非ざるなり之を異端辯妄の大畧となす。」

異端辨妄終

跋

余が俗弟子泰嶽ははじめ本化別頭の眞乘を研覈し、一時感ずる所ありとて八宗に周遊旋歴して性相の學理に潛心せり。このごろ著する所の宗教論をおくこせり。余欣むて之を讀むに愛國護法の丹情は紙面より溢れ、權則實の妙理は文々句々の間より活潑々地たり。謂つべし言ひかたき所を能く言ひ説きかたき所を能く説けり。と近來宗教に關する冊子の汗牛充棟も嘗ならざ。然れども未だ眞正に教理より論辯し來れざる者を見ざ。たましくみれあるも概む糸跡策たる議論として深遠なる教理に徹底せる者なきなり。

あわき泰嶽は此の事を慨きて本書をいれせる者に似たり。泰嶽の年かほ若く學かほ淺し。ゆゑ今一層奮勵あて學力と經驗とを得ば。必だ我が宗教社會の面目を一洗あて。自他俱安同皈寂光乃大目的を果さむと期して俟つべきかり。涅槃經にいはく。時を知るを以て大法師と名く。と希くは世の後進の士ハ能く時機を觀破あて弊害をかき佛法を擴張せよ。決あて佛祖の方便に惑溺して。無益の空論に奔りて。自他を錯亂し生ては國家の罪人となり。死しては佛祖の怨敵となる勿き。則ち此書をよみて聊ら感するまゝを記す

泉州蘇山 老納日因

明治廿五年十一月三十日印刷

全 年十二月二日出版

 定價金五十錢

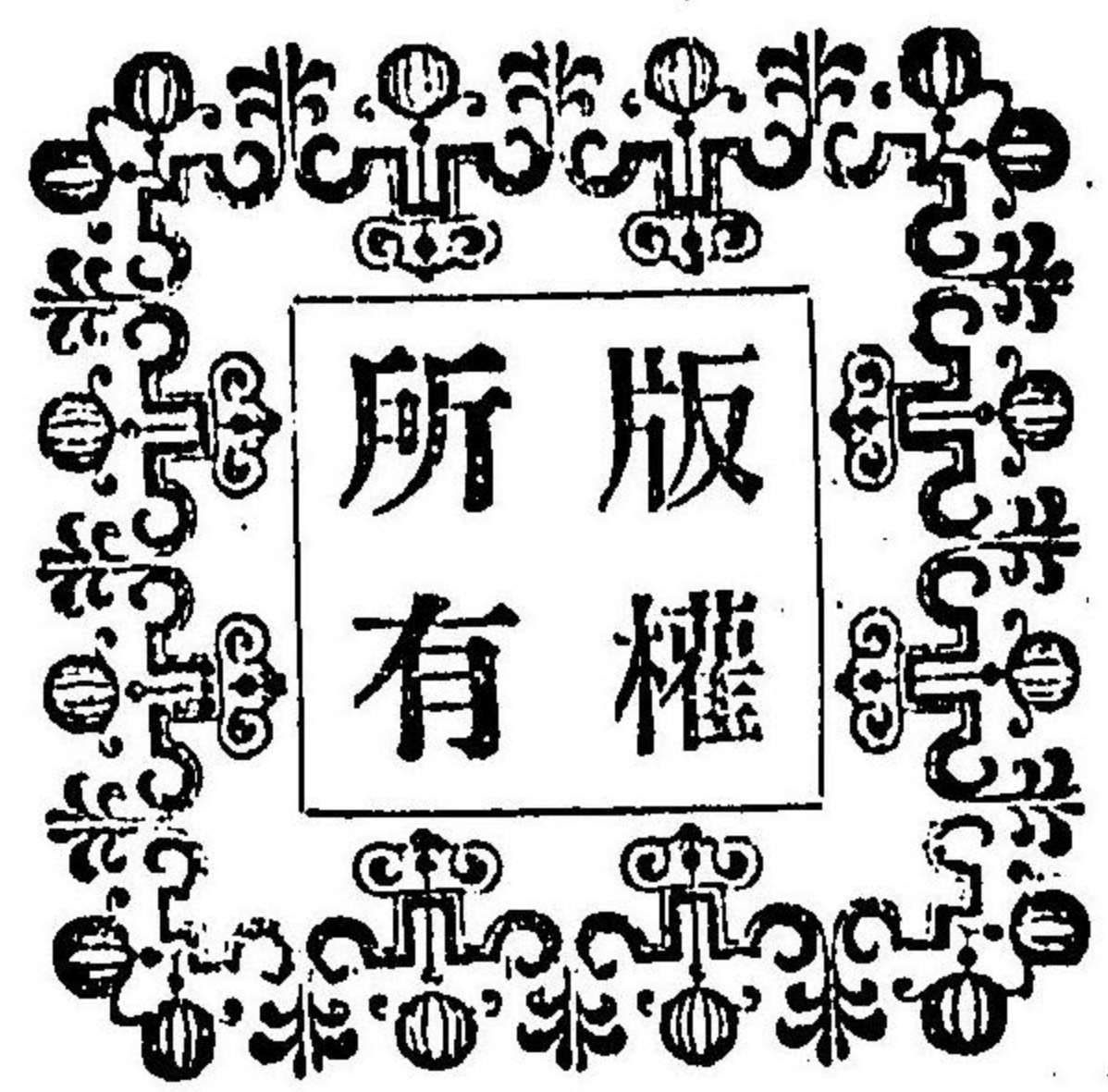
著者 東京市本郷駒込吉祥寺町十八番地 八卷 泰嶽

發行者 大阪心齋橋備後町四丁目卅一番邸 梅原龜七

印刷者 大阪心齋橋二丁目 中嶋藤次郎

印刷所 大阪南區安堂寺橋二丁目五十番邸 小牧熊太郎

大賣所 東京市本郷 東京麻布 京都 全
 哲學書院 鴻學書院 澤田友五郎 藤井佐兵衛 梅原支店



本誌賣捌所

(いろは順)

| | | | |
|------------|--------|------------|---------|
| 山口縣厚狹郡舟木 | 生田新一 | 松江天神町 | 川岡清助 |
| 陸前仙台國分町 | 伊勢安右衛門 | 渡島函館末廣町五番地 | 魁文舍 |
| 廣嶋大手町 | 早速社 | 尾張名古屋本町三丁目 | 川瀬代助 |
| 長野縣長野 | 西澤喜太郎 | 伊勢山田一志町 | 加藤長平 |
| 越後水原 | 西村六平 | 伊勢津大門町 | 川嶋九右衛門 |
| 廣嶋紙屋町 | 友田藤助 | 佐賀白馬場 | 河内莊助 |
| 加賀金澤橫安江町 | 近八郎右衛門 | 鹿兒島中町 | 吉田幸兵衛 |
| 長崎今下町 | 小野倉太郎 | 鳥取上魚町 | 横山安次郎 |
| 備中後月郡井原村 | 荻田元次郎 | 神戸元町 | 吉岡支店 |
| 越中富山西町 | 大橋甚吾 | 京都寺町通四條 | 田中治兵衛 |
| 美濃大垣岐阜町 | 岡安慶助 | 岡山西大寺町 | 武内彌三郎 |
| 京都寺町通押小路上ル | 若林茂助 | 松江白瀧本町 | 園山喜三右衛門 |
| 名古屋玉江町 | 片野東四郎 | 伊豫今治本町 | 曾我伊平 |
| 大分縣大分市竹町 | 甲斐治平 | 肥前長崎市引地町 | 鶴野書店 |
| 豐前小倉魚町 | 辛島倉吉 | 丹波國氷上郡柏原新町 | 中井正吉 |
| | | 越中富山東四十物町 | 中田書店 |

| | | | |
|-------------|--------|-----------|--------|
| 熊本縣熊本市新二丁目 | 長崎次郎 | 加賀大聖寺福田町 | 深城伊三郎 |
| 京都東洞院三條上ル | 村上勘兵衛 | 備後尾ノ道久保町 | 兒玉保兵衛 |
| 伊豫松山市湊町三丁目 | 向井藏次郎 | 山口縣山口中市町 | 小原松千代 |
| 豐前中津町 | 野依曆三 | 岡山上之町 | 細謹舍 |
| 大分京町 | 山川正三郎 | 大和奈良橋本町 | 坂田一耶 |
| 播磨國明石中町 | 藥師寺卯一郎 | 筑後久留米 | 菊竹儀平 |
| 馬關入江町 | 山名松次郎 | 陸前仙台國分町 | 有千閣 |
| 馬關中ノ町八十八番戶 | 山名支店 | 讚岐高松市丸龜町 | 宮脇仲次郎 |
| 越前大野郡大野町字清水 | 山本勝太郎 | 近江八幡 | 宮川金兵衛 |
| 肥前長崎酒屋町 | 安中半三郎 | 備後尾ノ道土堂町 | 三木半兵衛 |
| 阿波德島西新町五丁目 | 黒崎精二 | 廣島本町三丁目 | 三木半支店 |
| 對馬國嚴原今屋敷町 | 倉成惣次郎 | 岐阜米屋町 | 三浦源助 |
| 神戸相生橋 | 熊谷久榮堂 | 山口縣岩國新町 | 白銀伊兵衛 |
| 橫濱辨天通り四丁目 | 丸善書店 | 越前福井佐佳枝中町 | 品川太右衛門 |
| 廣島西横町 | 松村善助 | 近江彦根土橋町 | 廣田七次郎 |
| 京都御幸町姉小路 | 藤井孫兵衛 | 岡山中ノ町 | 森禎藏 |

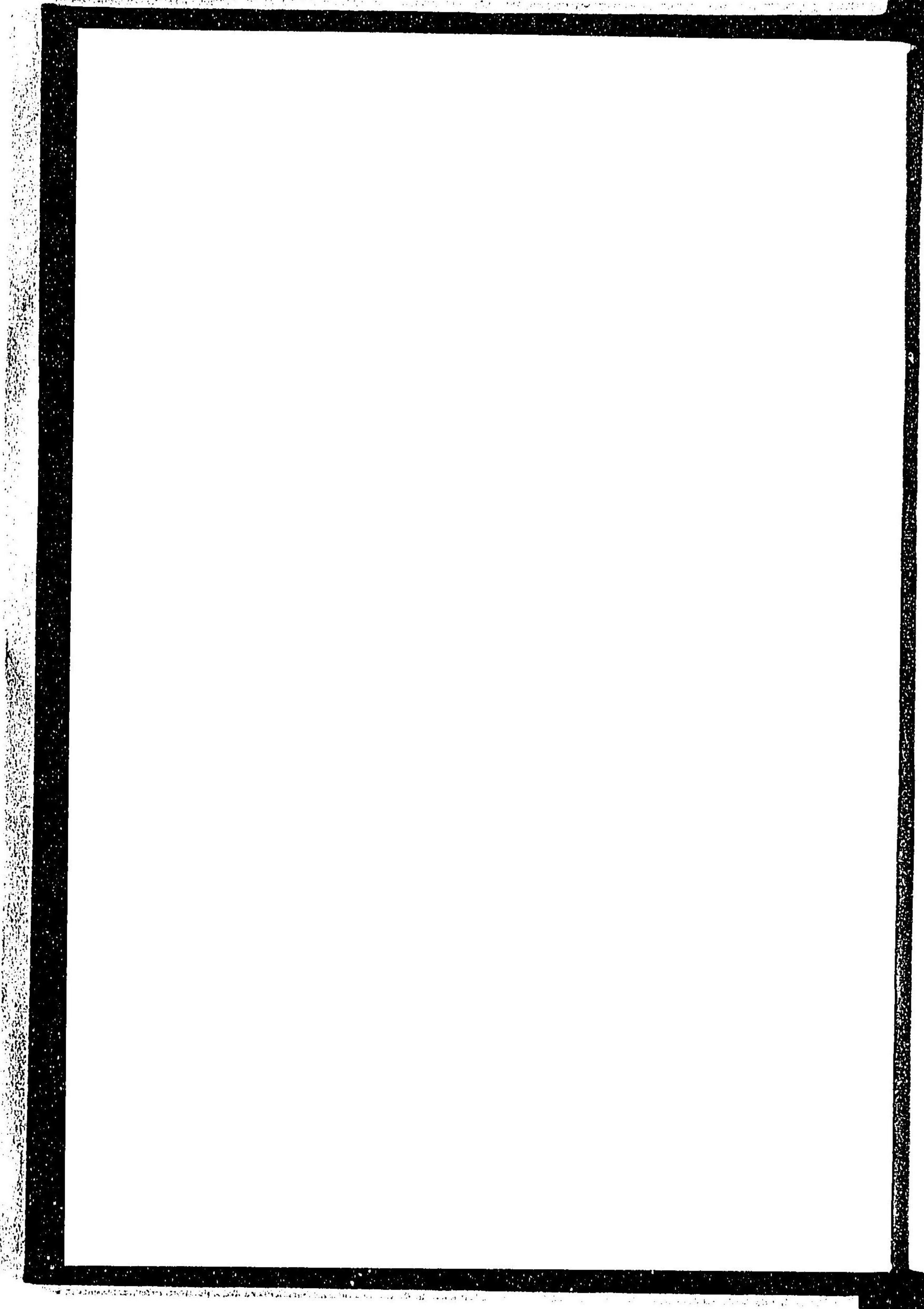
◎正 誤

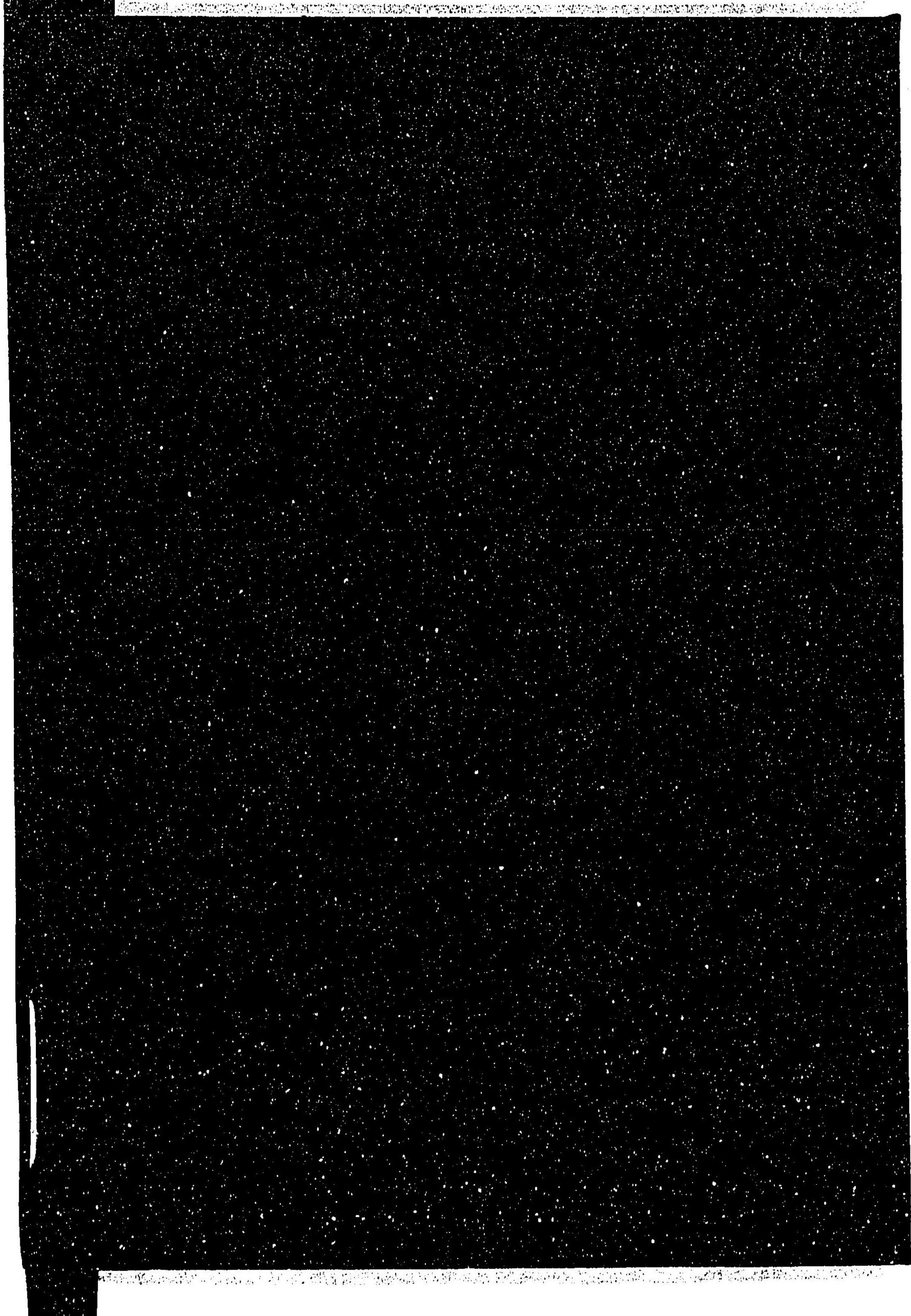
(正字)

序論 ○七丁五行 攘成ハ(攘成) ○八丁三行 楠延ハ(楠延) ○全七丁 遺書ハ(遺書)
 ○十二丁十一行 眞理光明ハ(眞理の光明を)
 本論 ○十丁十行 之れ過ハ(之れを過) ○十三丁三行 細註音と我心とハ(神と我心)
 ○十九丁十一行 國土ハ(國土) ○廿二丁八行 荀子ハ(荀子) ○廿三丁二行 好ハ(好
 み) ○廿四丁七行 感ハ(感) ○全十行 肅梁ハ(肅梁) ○廿六丁十一行 知漢ハ
 (癡漢) ○卅四丁一行 教徒ハ(教徒) ○五十二丁九行 約策ハ(約束) ○五十四丁三
 行 味されハ(味まされ) ○六十丁十行 凡ハ(凡そ) ○六十六丁六行 太闕王ハ(大
 闕王) ○六十九丁八行 盡滅ハ(盡滅) ○全九行 爾ハ(爾と) ○七十二丁一行 其
 母母ハ(母ノ一字ハ衍) ○七十七丁十一行 憤怒ハ(憤怒) ○七十九丁十二行 舊ノ下
 (君)ノ字ヲ脱ス ○八十三丁五行 逐ハ(逐よ) ○八十六丁五行 我悟ノ間(心)ノ字
 ヲ脱ス ○百二丁八行 日蓮ハ(日蓮) ○百八丁三行 滅否ハ(滅否) ○百一十一丁七行
 味者ハ(味者) ○百十二丁三行 心ノ在るハ(土ノ在る) ○百十七丁五行 陀彌ハ(彌
 陀) ○百十八丁七行 法華ハ(法華) ○全十行 法華華ハ(法華經) 除宗除法ハ(除宗除
 法) ○百二十四丁九行 永ハ(永ど) ○百二十五丁四行 録眼ハ(録眼) ○全五行 黒
 色ハ(墨色) ○百二十六丁九行 以言宜ハ(以言宜) ○百二十七丁四行 除きてノ下ニ
 (也)ヲ脱ス ○百二十七丁十行 着破ハ(着破) ○百三十一丁一行 無益ハ(無常) 全二

行透説ハ(透脱) ○百卅二丁十二行如期ハ(如期) ○百卅七丁六行如期ハ(如期) 全
勘修ハ(勘修) 全菩薩ハ(菩薩) ○百四十丁九行如(如) ○百四十二丁九
行始テハ(初テ) 五蘊魔ハ(五蘊衆) ○百四十八丁二行五蘊魔ハ(五蘊魔) 全三行滅
三毒ハ(滅三毒) ○百五十七行相伴ふとハ(相伴ふと) ○百五十二丁七行無味ハ
(無味) ○百五十三丁五行知玄ノ(玄)ノ字ハ(衍) ○百六十二丁一行無間ハ(世間)
○百六十五丁五行宣説ハ(宣説) ○百七十丁五行境境ハ(境界) ○百七十二丁五行
分折ハ(分折) ○百七十四丁五行誰からハ(誰らか) ○百七十七丁九行料問ハ(料問)
○百八十四丁十行樹抄ハ(樹抄) ○百八十八丁一行乘證ハ(乘證) ○百八十八丁
五行聲が法門ノ下(下)ノ字ヲ脱ス ○百九十九丁十二行非ずノ下(下)ノ字ヲ脱ス
○二百七十一行即ハ(即ち) ○二百十四丁七行利養ハ(利養) ○二百十八丁七
行がちハ(則ち) ○二百十九丁十行慢リハ(慢り) ○二百二十八丁二行(ア)ハ(ア)
全五行着被ハ(着被) 全六行打破ハ(打破) ○二百三十五丁九行摩訶祖ハ(摩訶祖)
附録 ○六丁十一行愛憎ハ(愛憎) ○十三丁七行佛教ハ(佛教) ○十四丁八行取
裏ハ(取裏) ○十七丁五行井底ハ(井底) ○二十一丁四行遣誠ハ(遣誠) 全五行遣教
ハ(遣教) ○廿六丁三行政務ハ(政務) ○三十一丁八行煩腦ハ(煩惱) ○三十
二丁明ノ下(下)ハ(衍)







33
131

013658-000-8

33-131

純正宗教論（破邪顯正）

八卷 泰嶽／著

M25

ABA-0127



